私たちは「市民が市民を支える社会」をめざします
Ｎｏ 21

情報誌「新しいふれあい社会」

（平成 29 年度版）

**この小冊子は平成 29 年 4 月から 30 年 3 月までに
発行した月報を収録したものです。**

認定 NPO 法人東葛市民後見人の会

独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業

新しいふれあい社会

認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局　我孫子市湖北台 6-5-20

平成 29 年 4 月発行（第 37 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

１年生になったら…

榧場　雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

明日は雛まつりという、春の気配そこはかとない穏やかな日の夕べのことでした。その穏やかさとは裏腹に、大阪豊中市の森友学園の幼稚園で、園児が横一列に並んで、教育勅語を諳んじている映像を見て、ショックを受けた、ひとりのお母さんの純粋な心の叫びともいうべき物語です。それは、国会でも激論されている政治問題でも、学識経験者が論じる教育理念でもありません。市中に住み、幼児期の子どもを持つ母親、市民ならではの角度から見た、机上では思いもつかないような気づきであり、心の叫びです。

娘は保育園の年長組で、もうすぐ卒園、4 月には入学を待つばかりの幸せな時を過ごしています。父親は交通事故の後遺症で足に障害を持っているので、私が生計を支えるためフルタイムで勤めています。けれど家庭は決して暗いものではなく、夫はハーフ勤務の傍ら、料理も掃除もその腕前は私より上手です。娘もなついています。しかし育児一切を任せることもできず、娘は生後 6 カ月のときから保育園のお世話になり、離乳食、おむつはずしなどまで、すっかりご指導いただきました。「保育園落ちた。日本死ね!」などと言う言葉が国会でも取り上げられる社会にあって、私どもの家庭では、保育園は乳飲み子の頃から、6 歳になった今日まで、親もおよばない細やかな心遣いと、実践で、育てて頂いたことについては、「感謝」と言うほかに言葉を知りません。

そんなときに、大阪の豊中の森友学園の幼稚園の園児たちが、うち揃って難しい教育勅語を何の淀みもなく、諳んじていることに、ただただ驚き、感心してしまいました。恥かしいことですが、私は教育勅語については全く無知の状態でした。漏れ聞くところによると、親に孝行、兄弟仲良く、友を信じ、学に励み…などと、良いことづくめですが、私が心を打たれたのは、その内容ではなく、4 歳や 5 歳の子どもが、長たらしい意味もわからないような勅語を、一言半句もらさずに覚えた、子どもの記憶力といおうか、それを引き出した指導力といおうか、その双方か、感心というより、不思議な思いです。娘の通う保育園では思いも寄らないことです。そうは言っても、私は娘が通う、保育園には感謝こそすれ、不満など露ほどもありません。先程も言ったように、娘は卒園、入学を待つばかりの、幸せいっぱいのときです。それは私も母として同じです。だって、親子ですもの。私って甘いでしょうか。浅はかでしょうか。娘は入学を前にして、自分の名前を書けるようになり、ひらがなは大方は読め、短い絵本もひとりで読めます。何よりうれしいのは、お友達も大勢でき、仲良く遊べるようになったことです。

ところが、そんな私を驚かせたのが、入学前の子どもを持つ母親の多くは、私学に入れようか、公立にしようか、一度は悩むと言います。「私高公低」などと言う言葉も罷り通っていることです。それは名だたる学校の児童、生徒の学力のほどを示した言葉ですが、私は今までそんな事は一度も考えたことがありませんでした。そんな私は母親として甘いのでしょうか。浅はかなのでしょうか。何も知らずに、赤いランドセルを、お雛さまの横に置いて、時には背負ってみて、はしゃいでいる娘の姿を見ると、哀れでなりません。単純で浅はかな母親の私を責められてなりません。

ずばりお答えすれば、お母さんは決して単純でも浅はかなどと卑下する母親像でもありません。逆に、良い意味での、「日本のお母さん」の姿を思い出させてくれる母親像です。障害を持つ夫を支え、生計を立てるためフルタイムで働き、子どもの成長を何よりの喜びとして、決して高望みはせず、しかし子どもの心には、しっかり向き合って、日々を過ごしておられます。そんなご自分を好きになってください。ご自分を誉めてあげてください、と先ずはストレートに伝えました。

その上で、「私高公低」ということについて、一緒に考えました。不勉強なことですが、私自身、その言葉については、あまり馴染みはありません。しかし、その意味するものについては、現在の、受験中心、偏差値偏重教育体制の問題を露呈しているように思いました。中学・高校の受験地獄の問題も絡んで、大学まで続いている私立を受験させたい親の意向が働いているように思いました。中学、高校の、心身共に発育盛りで、多面的な分野で多彩なものを取り入れながら、成長していく大事な時期に、無味乾燥な受験勉強だけに終わらせたくないという考えには、一理あると思います。そのためには、子どもの発達に関わる、基本的な問題として、幼児期からの心身・社会性の健康な発達に留意しなければなりません。家庭で親との情緒的な結合、同年代の仲間と交わる社会性など、幼児期の発達に関わる基礎がしっかりしていないと、表層的で、お受験的な英才教育を行っても、学童期、思春期にその脆さが露呈し、さまざまな心理的、社会的、教育的な問題が生じかねません。昨今、問題になっている不登校、いじめの問題なども、その一つとさえ言われています。

ここで問題を元に戻して、ご相談いただいた山本さん（仮名）宅の悩みにふれて考えました。山本さん宅では、ご両親は睦まじく互いに助け合い、子どもの養育についての意見も一致しており、子どもも親になついていて家族の情緒的結合は良好です。本人の知的発達についても自分の名前を読んだり書いたりでき、ひらがなは全部読め、絵本なども自分で読めるようになって、文字言語の習得、知識欲も旺盛となっていることも窺わせています。何よりもうれしいのは、お友達が増えて遊びが広がったということです。遊びを通して、チーム、ゲームとか、ルールのあることを学び、社会性が身についていきます。このように考えると、入学前の心身の発達は、すべて整っていると言って間違いありません。お母さんとしては、これ以上に、望むことは何ひとつないと思います。今さらに、森友学園の幼稚園の園児が教育勅語を諳んじて唱和していたことには拘ることはなく、「娘は卒園、入学を待つばかりの幸せいっぱいのときです。それは私も母として同じです。親子ですもの」と言ったお母さんの心を大切にしてください。明日は雛まつりです。卒園、入学の前祝いともなる、楽しい雛まつりを家族で楽しんでください、と伝えました。そして、私共からのプレゼントとして、ＮＨＫ短歌の入選の秀歌を紹介しました。

○　たから箱 開けるがごとき 始業式 一年一組 三十五人

こんな生き生きとした優しい先生が待っていてくれるといいですね。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前９時～午後９時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈真の生きていく力とは〉 ◆子どもの年齢の理解力に応じた指導内容であり、ピグマリオン効果に惑わされず、子どもの将来、自分の生き方に自己決定ができるような力のつく学校教育・家庭教育であってほしいのである（ｙ）。受験勉強も教育勅語も良いではないですか。教育の目的? しっかりと学問を収め、知識や技能や教養を深め、自立する。常識と適応力を備えて、社会に役立つ人間になる。先人曰く「一身獨立して一国獨立する…。獨立の氣力なき者は國を思ふこと深切ならず」と（h）。　　独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業（申込中）

新しいふれあい社会　　認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局　我孫子市湖北台 6-5-20

平成 29 年 5 月発行（第 38 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

1 年生になったら…（その 2）

榧場　雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

桜若葉、柿若葉と木の名を冠しての、眩いような若葉の色に、春を惜しむというより瑞々しい、個性豊かな生命力を覚えます。その実例ともなるエピソードをお届けします。

話の第一幕は、4 月号で紹介した山本さん（仮名）と名乗る、ひとりの母親の率直な視線で見た気づき、心の叫びとも言いたい、電話相談に始まります。それは明日は雛まつりという、春の気配そこはかとない、穏やかな夕べのことでした。折から、大阪・豊中市の森友学園での諸々の問題で、国会では侃々諤々の激論が飛び交って、いつ果てるとも知れない騒がしさに、少々うんざり気味の中継放送が終わった直後のことでした。自然も正直で、春愁と呼びたい物憂さが漂っていました。

山本さんの相談は、そんな夕べの雰囲気に相応しく落ちついた、しかし憂いを含んだような声で、「ご相談というより、私の心の内を聴いてください」と切り出し、私は今月末には保育園を卒業し、4 月に入学を待つばかりの幸せいっぱいの娘を持つ母親です。母親として私も同じ思いでいます。だって、親子ですもの、と明るく自己紹介し、そんな私が心配というより、わだかまりを持つのは、森友学園の幼稚園児が、教育勅語を何の淀みもなく一言半句間違えずに諳んじていることでした。私は感心と言うより、驚いてしまいました。同じ年頃の子どもの母親として、その能力と知力には驚いてしまいました。娘が通う保育園では思いもよらない教育です。そう言っても保育園に対して不平や不満などは、露ほどもありません。実は私どもの家庭では、父親が交通事故の後遺症により歩行障害があり、私は生計を支えるためにフルタイムで勤めています。そのため娘は生後 6 カ月のときから保育園のお世話になり、離乳、おむつはずしなど基本的な躾まで、お世話になりました。卒園を前にして、「感謝」と言う他に言葉を知りません。

父親は先程も言ったように交通事故の後遺症で足が不自由で、パート勤務を余儀なくされています。しかし勤務の傍ら家事も厭わず、料理、掃除の腕前は私より上手です。娘もすっかり懐いています。入学前のお勉強のほどは、自分の名前は漢字で読み書きができ、ひらがなも大方は読めて、簡単な絵本は、ひとりで読むことができ、話のあらすじを話してくれます。何よりうれしいのは、お友達も大勢でき、仲良く遊べるようになったことです。

こんな私を驚かせ、悩ませたのは森友学園での教育勅語の全文を諳んじていたことに端を発して、入学前の子どもを持つ母親の多くは、私学にしようか、公立にしようか、一度は悩むと言います。「私高公低」と言う、名だたる児童生徒の学力の程を示す言葉も社会に罷り通って入りと言います。私は一度もそんなことにふれて考えたことがありません。私は母親として甘いのでしょうか、浅はかなのでしょうか、と淡々と、しかし切々と訴えられました。

政治家、有識者の論談風発するなかで、子育て真っ最中の文字どおり市民の視線で見た山本さんの訴えは、机上論では思いもよらない気づき、心の叫びがあり、胸打つものがありました。

（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

私は思わずもストレートに、お母さんは、母親として決して甘くも浅はかでもありません。逆に、良い意味での「日本のお母さん」を思い起こさせてくれる母親像です。障害を持つ夫を支え、生計を立てるためフルタイムで働き、子どもの成長を何よりの喜びとし、子どもの心にはしっかり向きあっておられます。そんなご自分を好きになってください。誉めてあげてください。

明日の雛まつりは、お子さんの卒園、入学の前祝いともなるよう、ご家族で楽しんでください、と伝えました。そして私共からの願いをこめて、ＮＨＫ短歌に入選した秀歌

○　たから箱 開けるがごとき 始業式 一年一組 三十五人　　を紹介。

こんな生き生きとした優しい先生が待っていてくれるといいですね、と伝えました。

ここまでを第一幕とします。

第二幕は 4 月 11 日入学式の日の出来事をもって、幕開けとします。

入学式と言えば満開の桜を思い浮かべますが、今年は開花してから数日続いた花冷えもあって、盛りが長く、入学式の当日はまさに桜花爛漫、新入生を祝福するかのように咲き誇っていました。山本家のひとり娘、葉子さんも胸を膨らませ両親に伴われて、この日を迎えました。

クラスは１年１組、クラスメイトは 35 人、奇しくもあのＮＨＫ短歌入選の秀歌のとおりでした。担任の先生は不惑半ばの、優しく落ち着いた「お母さん先生」でした。教師になって 20 年あまり、1 年生の担任になったのは 3 回目ですが、新年度、ましてや新入生を迎えるときの清々しく心弾む思いは、まるで宝箱を開けるときのようです、と初々しいほどの挨拶がありました。

山本さんは思わず、入学を前にした子どもを持つ母親の不安を、東葛市民後見人の会の相談室に相談したところ、ＮＨＫ短歌に入選した、たから箱 開けるがごとき 始業式 一年一組 三十五人という短歌を紹介され、「こんな生き生きとした優しい先生が待っていてくれるといいですね」と言って励まされたこと、その願いはそのままに適えられたようです、と感動を一気に話しました。新入生の親たちから、「オーッ」と言うような声が、いっせいに洩れました。先生は教壇を降りて、その短歌は私の気持ちそのものです。教えていただきありがとうございます。私もその短歌のような教師になることをお約束します、と深々と頭を下げられました。

この感動のシーンは、入学式当日の午後、「木曜日の相談日を待っていられずに」と断りつつ、「１年１組 35 人の親と先生は、入学式の日の今日、心が一つになりました」と結んだ、山本さんからの明るく、うれしい知らせがありました。

お話はこれで終わりではありません。山本さんの話をきっかけに、全員の自己紹介になりました。中でも赤沢さん（仮名）の話は感動的でした。赤沢さんは小児科医で、ターミナル期の病棟を担当しています。特に学童期の長期経過の患児、小児がんの患児は、総じて周囲の反応について極めて敏感で、言葉のコミュニケーションだけでなく、家族や医療者の態度・表情などの言葉によらないコミュニケーションが大きく作用し、強い防衛反応を示して、身体的医療ケアより、心理的ケアが求められます。先生が言われた「清々しく心弾む思い」をそのまま裏返し、「痛々しく心重い」を受け入れて、子どもの思いを共有して、腰を据えて対応することによって、子どもたちは周囲から見守られていることを感じ取ることができる、と示唆された思いがしました、と感想を語りました。すかさず先生は、良いお話を聞かせていただきました。山本さんが相談された相談室も、赤沢さんが勤められる小児病棟も、かくいう小学校も、「子どもは社会のたから」という視点に立って、点と点を結ぶと正三角ですね、と言われました。これまた感慨ひとしおのものがありました。

それから2日後の木曜日、山本さんから再度の（正しくは4回め）の電話がありました。
入学式直後のクラスの顔合わせ会での感動的な話に水を差すようで、ひかえていましたが…、と前置きし、実は学童保育の件で辛い話もありました。“待機児”というと、保育園に入れず入園を待っている子どものことと思われがちですが、実は学童保育の恩恵にあずかれない子どもが少なくないことを訴える、久保さん（仮名）と名乗るお父さんがいました。　訴えによると、両親は共に仕事を持っており、帰宅が遅く、留守番は今年4年生になった長男と、1年生になった次男です。長男は4年生になったことで、学童保育は外されましたが、部活動に入ることで救われています。ところが弟にとっては、兄の帰りが遅くなるので、一人で留守番する時間が長くなってしまいます。妻は帰宅後あわただしく、食事の用意をしたり、掃除をしたり、洗濯をしたり、見ているだけでも忙しなく、急き立てられるような思いがします。もちろん私も手伝いますが、互いに余裕がなく、会話も団楽と言うには程遠く、まるで事務連絡か質疑応答の様相です。これでは子どもにとっても良いはずはありません。今日も、母親は仕事から抜けられず、私ひとりが付き添って参りました。出掛けに「仕事はやめようかな」と嘆いていました、と実体験に基づいた真に迫ったものでした。みんなは黙ったまま、俯いてしまいました。
このときも先生は、「実は私も共働きで、夫も教員で帰りが遅くなることも少なくありません。そんな生活の中で、心掛けていることと言えば、家に帰ったら互いに教師はやめて、父親になり、母親になることです。ひととき「両親共働きのかぎっ子」などと言う言葉が社会的な用語として、通用するようになり、日中に母親がいないので、子どもの性格が暗く、時に非行に走るなどと言う識者の説が罷り通っていたこともありました。しかし、そんなことは決してありません。もしも、何らかの悪影響があるとしたら、子どもと十分に接触できない後ろめたさから、一緒にいる時間は、何でも言うことを聞いてしまったり、反対に親が留守がちだから、しつけもなっていないなどと言われないように、厳しくしつけ過ぎてしまうことです。何もかも完璧にしようとして、短い間に、子どもに要求を出し過ぎてしまうことです。「宿題できたの？」、「おやつ食べた？」から始まり、「テストはどうだった？」、「学校からの連絡はないの？」などと、矢継ぎ早に聞いてしまいます。親は会話をしたつもりになっても、子どもからみれば、急き立てられているような話ばかりです。おっしゃるように家族の団楽と言うには程遠く、質疑応答的な様相を呈してしまいます。親も子も家庭にいるときくらい気楽に過ごしたいものです。「〇君の家の犬が、きのう子どもを産んだって。母犬そっくりの尨毛だって」「ふさふさ毛の子犬なんて、ぬいぐるみみたいで可愛いでしょうね」、こんな他愛もない会話で親と子がくつろげる時間があれば、留守番中のさびしさも忘れてしまうと思います。これは教師の理論ではなく、実体験からの感想です、と先生は別人のように多弁でした。その多弁さが不思議に優しく胸に響いてきました。

先生は語調を改めて、働いているお母さんは増える一方です。働く理由もさまざまで、経済的な理由だけでなく、母親自身の生き方の問題として、仕事を続ける選択をすることもあるでしょう。母親にも子育て以外の人生があるのは当然のことです。家の中ばかりに目を向けないで、社会との関係で親自身も成長していくことは、とても大切なことだと思います。
ここで求められるのが学童保育ですが、正直に言って、保護者のすべての求めに応じられないのが厳しい現実です。私も辛酸を嘗めてきたので、お気持ちはよくわかります。けれど、嘆いてばかりいられません。広く目を開くと、“地域で子どもを育てる”理念のもとに、子どもたちが地域で楽しく過ごせるよう、近隣のお母さんたちが協力して、順番に子どもの面倒をみるグループを作っている例もあります。「ママ友の会」で子育ての悩みを語り合える場を持っているところもあります。

我孫子市には「あびっ子クラブ」という、公的にも知られている、地域の子どもたちの遊び場があります。子どもたちが放課後に学校の敷地内で、安全・安心して遊べ、自由に過ごせる場所です。全小学校への設置を目指し、地区の小学校名を冠し「〇〇小ちびっ子クラブ」と呼んでいます。近くは、今年の3月1日に市内で12校目となる「新木小ちびっ子クラブ」をオープンさせました。すでに地域の協力も得て、子どもたちは楽しいひとときを過ごしています。

もちろん、家族の協力は欠かせません。子どもを含めて、家事を分担し、協力してもらうことで、家族を思いやる気持ち、感謝する気持ちが養えると思います。長い話になってしまいましたが、これは仕事を続けながら、子育てをしている先輩の言葉として聞いてください、と本当に長い話になりましたが、誰ひとり反発する者もなく、優しく力強い感動だけが印象として残りました。

この2回にわたる各1時間余、あわせて3時間に及ぶ、つぶさな話を第二幕とさせて頂きます。途中で、幕会いとすべきところもあったのですが、そうすると感動まで中断されてしまいそうで、ひたすら聞かせて頂き、ひたすら書かせて頂きました。その思いは語り部ともなる山本さんも同じだと思います。

そしていよいよ第三幕。先生の話に感動した1年1組のお母さん数人が、誰言うとなく集まり、ママ友的関係ができ、そろって地域の子ども会を訪ねて話を聞いたり、他地区の「あびっ子クラブ」を見学するなど、積極的に勉強しました。中でも感心したのは、市内の「根戸小あびっ子クラブ」では、提案型公共サービス民営化制度を利用し、学童保育室との一体的な運営が民間事業者に委託されていることでした。まさに自助、共助、公助の実態を見た思いがしたと言います。更に恥しげに付け加えられたのは、“1年生になったら友だち百人出来るかな”という子どもの歌ではないが、今までは住む世界が違うと思っていた、ドクターママとの家族ぐるみの友だちになれたことです。切っ掛けは何と言っても紹介して頂いたＮＨＫ短歌の入選歌だったので、二人して指を折りつつ、合作の一首を作りましたと言って、

○　桜散り　若葉の色に変わりゆく　新しき友の息づくおもい

という一首を披露してくださいました。この一首をもって第三幕の終了とさせて頂きます。

ふり返ると、3月の初めから4月下旬までの、数にして6回、総じて5時間余におよぶ「電話によるふれあい物語」とでも題したいような実話です。

言うまでもなく、こころの相談室は人びとの心の健康を守るための信頼感や親密感や安心感など、情緒的な支援を含む、支え合う人間関係全般を指しています。更に加えれば、相談することによって、互いの信頼関係や満足度、自主性が高まり、ひいては互いの人間的成長が生じることです。

山本さんを巡っての物語が、このことを如実に物語ってくれています。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前9時～午後9時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈忘れ得ぬ一日〉 ★この日の感動は1年1組35人の心にしっかりと刻まれたことでしょう。★前号の「受験競争も教育勅語も良いではないですか」の表現は言葉足らずでした。偏差値教育の受験校や教育勅語の幼稚園に、行くも自由、行かぬも自由、自分の判断が大切、との思いでした。★人間社会の秩序を維持する基準は10：20：40：20：10の黄金律、中道（間）層を挟んで意見や評価の違いと分布を示します。戦後は、教育や国防など国の根幹問題に関する考え方の相違が顕著です。天皇制もしかりです。★明治の賢人の言葉に「帝室は萬機を統るものなり、萬機に當るものに非ず。…新に偏せず古に黨せず、蕩々平々、恰も天下人心の柄を執て之と共に運動するものなり。既に政治黨派の外に在り。焉ぞ復た人心の黨派を作らんや。謹て其實際を仰ぎ奉る可きものなり」と(h)。

新しいふれあい社会　　認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）
事務局　我孫子市湖北台 6-5-20
平成 29 年 6 月発行（第 39 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

１年生になったら…（その 3）

榧場　雅子
（臨床心理士・精神保健福祉士）

絵にあるような、桜花爛漫の入学式を迎えたのは小学生ばかりではありません。袖丈も肩幅も、文字通り身の丈に余る制服に身を包み、一見してそれとわかる初々しい中学生も新１年生です。迎えてくれた桜も葉桜となって、新緑、薫風と、健やかな子どもの成長を連想するにふさわしい頃になりました。5 月 5 日は「子どもの日」、古くは江戸時代から男の子の節句とされ、武家では幟を立て甲冑を飾り、町人も鯉幟を立て武者人形や刀を飾り、等しく男の子の健やかな成長を願い、祝ってきました。邪気を払うため菖蒲や蓮を軒にさす風習も今に続いています。一方、5 月初旬の思わぬ寒気によって、農作物の瑞々しい新緑が襲われることがあります。八十八夜の忘れ霜と呼び、農業に関わる人々から恐れられています。

人としての成長過程、いわば”青の時代”青年期に思わぬ忘れ霜に見舞われることがあります。それは、あたかも瑞々しい生命力あふれる若菜を襲う、忘れ霜の襲来を思わせるものがあります。

石上涼太君（仮名）は、4 月に市立〇〇中学に入学したばかりの元気なピカピカの 1 年生です。祖父と母親が地元で小児科医院を開業しており、「地域の人達から親しまれる家庭医でありたい」という強い希望があり、わが子が地元の公立中学に進むことにも何の迷いがなかったと言います。両親も共に地元の小・中学校の出身です。父親は石上小児科（仮名）の一子ですが、高校時代に、ボランティアを通して社会福祉に関心を持つようになり、大学は医学部に進まず、社会福祉系大学で学び、大学院にも進んで研究を重ね（社会学博士）、現在は母校で後輩の指導に当たっています。母親は、幼い頃小児喘息を患い、しばしば石上先生のお世話になり、小児科医に憧れるようになり、医大に進んで小児科を専攻して、卒業後は石上医院で家庭医としての実践も学んで、望み望まれて、石上家に嫁ぎ、舅が経営する石上小児科の医師になりました。事情を知っている地元の人からは、今もって洋子先生（仮名）で呼ばれています。ご本人も、この呼び名が大好きと言います。

こんな健全な家庭に育った涼太君は、何の問題もなく健やかに育ち、中学入学の日を迎えました。入学式には両親そろって出席しました。そこで、ちょっとしたアクシデントがありました。それは両親が並んで保護者席に着いたとき、校長がやってきて、「あちらに席が用意してあります」と、慇懃に挨拶しました。それというのも、母親は地区在住の小児科医として、教育委員会から校医の委嘱を受けていたので、来賓席が用意されていた故のことでした。母親は一度は辞退しましたが、父親（夫）の勧めもあり、公的な立場を考えて、席を移り、保護者席には父親 1 人が残りました。

それは近くにいた多くの人が見ていたことで、誰しも違和感を覚えることではありませんでした。ところがそれは、涼太君にとっては思いもかけなかった忘れ霜の襲来でした。

（平成 29 度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

入学式から8日目の夜、涼太君は診察室にあった母親の白衣に鋏で切り傷をつけてしまいました。母親は、いつ誰が何のためにこんなことをしたのか、不審に思いながらも、むしろ不審なるが故に、誰にも言わず、様子を見ていました。ところが、涼太君の行為は夜な夜なにますますエスカレート、20日目の夜半には、ラシャ鋏で白衣を切り裂いてしまいました。ここに至って、母親は、夫にも、舅にも姑にも、ことのなりゆきをすべて話して対応を相談しました。みんなは驚きながらも、真剣に考えましたが、他に異常行為は見当たらないことから、何らかの意味で母親へのサインであろうとの意見で一致しました。これを受けて母親は、涼太君と二人きりで、診察室で話し合いました。以下、母親の訴えを、一人称でありのままに記します。

診察室に入るや涼太は立ったまま、「僕をここへ呼び入れたのは、診察なの? 聴取なの?」と聞きました。その鋭さに私は一瞬たじろいでしまいましたが、やっとのことで踏みとどまって、診察席ではなく、面談室の背もたれのついたキッチンにでもあるような椅子に座り話し合いました。
ここ（診察室）で話し合いたいと言ったのは、診察でも聴取でもありません。貴方のしたことは、貴方が一番よく知っていると思うが、「何が（なぜ）あなたをそうさせたのか?」その辺りのことを母親として知りたかった。もっと言えば、貴方の行為は私へのサインだと思ったが、そのサインを送った胸のうちを聞きたかった、と伝えました。涼太は「母親として知りたかったと言うのは、本当でしょうね」と念を押した上で、語った言葉、その真実、その意外性に私は言葉を失いました。

話は入学式の日に遡ります。私は夫と共に保護者として参列したのですが、校長からの要請で、校医として、来賓席に移りました。面映い思いもあったのですが、式の始まる時刻も迫っており、周囲の人も見ていた中でのことで、公的立場を優先すべきとの咄嗟の判断によるものでした。

ところが、これが涼太の友達との間で大きな話題となって、「君のお母さんは医者だというが、それだけでなく、地域の有名人なんだね」などと、話しかけられることが多くなったと言います。それは決していじめでも、悪意でもないことは分かっているが、度重なると次第に重荷となってしまい、医者であり有名人のお母さんより、ピンクのトレーナーを着て、近所のおばさんと立ち話をして笑って入るお母さんの方が「僕のお母さん」という思いが強くなった、とも言いました。
夜になると、その思いは更に強くなって白衣のお母さんの姿が嫌になり、眠れなくなってしまい、起きだして、白衣を切ってしまった。一度やると、やめられなくなってしまった、と一気に語り、「ごめんなさい、ごめんなさい」と幼子のように泣き出してしまいました。私は黙って引き寄せ、抱きしめ、その背を撫でてやるのが精一杯でした。

これは現在形の生々しい実話です。相談者は小児科の家庭医であり、子育て真っ最中の母親です。改めて、青年期前期（13～15歳）の萌え出ずる新緑のころに例えられる成長期のするどい感性と、反面の脆さを思い知らされました。更にはこの期を襲う、忘れ霜に例えられる危機を思いました。それに真正面から真向い、共に考え乗り切るのも、母親であり家族だと厳しく教えられました。

○ 忘れ霜　今しひそかに結ぶらむ　するどく星のひかり冴えつつ　　岡野豊彦　『忘れ霜』

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前9時～午後9時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈健全な家庭とは〉 ◆多感な成長期の子供の心情に絡む相談が数多く寄せられます。子供の成長過程において、悩みを持たない家庭などありません。大切なことは問題発生時の家族の対応です。◆僅かな兆候を見逃がさない。親が子供と真剣に向き合い、一緒に解決に当たる。どの家庭も、こうして家族の危機を乗り越えてきました(h)。

新しいふれあい社会　　認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局　我孫子市湖北台 6-5-20

平成 29 年 7 月発行（第 40 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

高校１年生―自我に目覚めるころ―（その 4）

榧場　雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

満開の桜の花の祝福を受けて入学した新１年生の上にも月日は流れて、瑞々しい若葉の頃を経て、その色も眩いほどの情熱的な万緑の季節を迎えました。

人の成長もまた年単位で、早春の花を思わせる学童期、瑞々しい新緑にも例えられる中学時代を過ぎて、万緑の頃と言われる高校時代を迎えます。男の子は一段と逞しく、女の子は更に美しく、青春真っ直中を思わせます。しかし、この期には、自分の生き方を見つけ出すという課題に悩み、時に青嵐にも例えられる疾風に襲われることがあります。

鈴木繁さん（仮名）は、現在２度目の高校１年生です。始めの高校１年生のときは（昨年度）、理想と現実の葛藤、心と体の発達のアンバランスのなかで、自分でも思いもかけない攻撃的衝動に襲われながら、その衝動を受け入れ、自分を見つめ、多くの人に出会って、階段を上るようにして自分のあるべき姿を模索し、作り出していく心の旅路でした。

繁さんとのつながりが始まったのは平成 28 年 9 月のこと、母親からの電話によるものでした。

息子は高校１年生ですが、不登校中です。合格した高校は世間的には超一流と言われる、人もうらやむ男子進学校でした。合格した時は、顔を真っ赤にして喜んだくせに、いざ授業が始まってみると、授業の進め方が納得できない。まるで受験のためのトレーニングのようで、高校の学習と言うには程遠い。生徒もそれを良しとして、テストの得点の競争相手というのか、ライバルに過ぎないと、もっともらしい理屈をつけて、ゴールデンウィーク後は登校を渋り、登校すると言って家を出ながら、近くの公園でぼんやりしているところを見つけ連れ帰ったこともあります。結局、出席日数不足で進級はおぼつかないと言われ、すべり止めにしていた某大学の付属校へ転向しました。

ところが、今度は、生徒の学力が低い、考えが幼稚だと言って、2 週間ほどで登校を渋るようになりました。加えて、男女共学校のため、男女の交際がオープンで、中にはペアを自他ともに任じているふたりも幾組かいる。「親も許しているのか?」と聞いたら、「遅れている！」と笑われてしまったと怒っていた。それを機に完全に不登校状態に陥り、「将来が見えない」と言って、自室に引きこもっています。親バカと笑われそうですが、こんなことになるまでは、親の言うことを素直に聞いて、成績もよく、問題ないと我が子を信じていたのに…、と嗚咽を漏らすのでした。

お母さんのおっしゃるように、お子さんは頭も良く、性格的にも素直に良く育っておられると思いました。それ故にこそ、発達心理学的にいう、青年期に課せられた、自分の生き方を見つけ出す課題を真正面から受け止めて悩んで苦しんでおられるのではないでしょうか。一見すると、周りの人達を軽んじての反発のように見えますが、その実は、生真面目さ故の葛藤、模索ではないでしょうか。一方、親御さんとしては、もともと素直で頭の良い子なるが故に、良い方向に向けてやるべきと、ついつい力み過ぎてしまったところがあるのではないでしょうか、と私的感想を述べるだけの対応で終わってしまいました。

それから3か月後、暮れも押し迫った12月某日に、繁さん本人から電話がありました。

Ｋ市に住む鈴木繁と言います。9月に母親が僕の不登校のことで相談したと思います。その際に、「高校生の学校への不満や不登校は一概に異常行動と決めつけず、青年期の発達過程で、理想と現実の葛藤、自分の力であるべき姿を作り出そうとして、親からの離脱を試みるひとつとして、不登校になることもある、親として力み過ぎないように」と言われた、と母が話してくれました。その一方で、母が精神科クリニックや教育相談所などに相談していたことも知っています。それらのことを踏まえた上で、自分としてはどうすべきかを模索した結果、改めて自分の意思で新しく志望校を見定め、受験し直すべきだと考えました。このまま復学しても、また転校しても、留年になり、1年が無駄になるのは必定だからと思いました。両親に相談したところ、父は「そこまで考えているなら」と言い、退学届の保護者欄に署名押印してくれました。母も黙って頷いてくれました。その両親の態度に、僕を信じてくれていると思いました。その根底にあるのは、母が相談したときの、先生の言葉だと思い、僕の決意を報告しておくべきだと思って電話しました、というものでした。

相談員として、繁さんが才能的にも恵まれ、大事に育ててくれている両親がいて、正しく育っていることを確信しました。繁さんにもその旨を伝え、電話を下さったことを感謝しました。

それから 3 ヶ月余、桜の蕾も脹らんで開花宣言を待つばかりのとき、「鈴木繁です」と名乗り、「１年ぶりで高校１年生になりました」との明るい報せがありました。新しく入学した学校は、モラロジーを旨とし、無味乾燥な受験勉強だけを重視するのではなく、クラブ活動も多種多様で、生徒会活動も盛んで、「僕が希望した学校を見てください」と誇りたい思いです、と結びました。

繁さんからのうれしい報せは更に続きます。1年半前に、元プロ野球の花形選手Ｋの覚醒剤の使用をめぐって逮捕起訴された事件に関連して、1 カ月余にわたって、電話での対話を重ねた後に、この件を反面教師として、自らの進路として社会福祉士の道を選んだ上田一樹さん（仮名）の記事を本誌で採りあげたことがありました（28 年 11 月号）。繁さんと上田さんとは子どもボランティアの仲間で、この高校を選ぶに当たって、上田さんが自信をもって自分の母校を勧めたそうです。そして私共の相談室のことも、上田先輩の紹介によるものと付け加えてくれました。

今さら解説めいて言うことではありませんが、高校時代は「親からの離脱」の大切な時期です。親からの離脱は、親を拒否することではなく、守られ束縛される関係から、心の絆で結ばれる関係に変化するときです。健全な関係の場合は、親への全面依存から、相互依存の関係に移ります。

○　あした子は 高校入学の式向かふ 八十葉の樹となれ 父もならむぞ　　伊藤一彦『森羅の光』

伊藤一彦氏は心理学者で、現代歌壇の重鎮です。「八十葉」は「やそば」と読む古語で、緑の葉が豊かに繁っている様子を表します。柔軟にしなやかに繁る大樹になって欲しいと願っているのです。「父もならむぞ」と言う結句が、子の出発に贈る父の言葉に、この上もなく力を与えています。これをそのまま頂戴し、鈴木繁さん親子への祝福と励ましの言葉とさせて頂きます。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前9時～午後9時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈君たちはどう生きるか〉 ◆若者の生き方に感動しつつ、ふと、ある名著を思い出しました。◆世に出る前の準備中の 15 歳の少年が、周囲に好奇心を持ち、社会問題や矛盾を知り、挫折を経験し、人間の悩みと過ちと偉大さを学び成長していく物語です。◆この時期は、社会の役に立つ人になるため、なんの妨げもなく勉強ができ、自分の才能を思うままに伸ばしていけるときなのです(h)。(独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業)

新しいふれあい社会　　認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会
情報誌（毎月 2500 部発行）
事務局　我孫子市湖北台 6-5-20
平成 29 年 8 月発行（第 41 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

青年期の体と心の迷い、そして家族

榧場　雅子
（臨床心理士・精神保健福祉士）

4 月から始まった「1 年生になったら…」と題する物語三編。小学生から高校生までの新入生の晴れがましさと、その裏に潜む不安と複雑な思いと現実を綴ってきました。

綴ったと言っても、事柄の解説でも、ドキュメントでも、ましてやフィクションでもありません。当相談室に寄せられた、現在形の実体験とその思いを、ご本人の同意（許可）を得て文章化した、いわば代弁的な記録であり、偽りのない感慨です。これを読んで下さった、市中に住む子育て中の母親から、相次いで問い合わせや感想が寄せられました。特に私が胸を打たれたのは、N 市に住む、清水和子さん（仮名）からの励ましと要望でした。以下、その声をそのまま記しました。

私は元中学校教師です。現在は認知症の姑の介護に当たり、高校２年と中学２年の二人の息子を育てている専業主婦です。夫も公立高校の教師をしていて、家庭的には特に問題ありません。

今から２年前のこと、中学３年の担任教師として、生徒たちの進路指導にもあたっていました。折から長男も中学３年で、高校受験を控え母親の立場と教師の立場の板ばさみに悩んでいました。その重荷を背負ったまま、担任クラスの保護者会の「高校受験に当たり、志望校の選定について」と言う議題に対し、教師面をして（清水さんの表現）、「志望校の選定に当たっては、でき得る限り本人の意思を尊重してください」と言うと、あるお母さんから「先生はご自分の子どもに対しても、同じ態度が取れますか！」と反発されました。真正面から出刃包丁を胸元に突きつけられたような思いがしました。その辛さを癒してくれたのが、「新しいふれあい社会」（27 年 12 月号）でした。

○　**親子から親と子になる時が来て　との一字のふくらみやまず**　というＮＨＫ短歌の投稿歌の添削例をめぐって、筆者の感慨を綴った一文でした。作品の良否の程は別にして、青年期の我が子を見守る父親の思いの深さを感じます。「親子」とセットで考えていた関係から、「親」と「子」の二人の関係へ移っていくときの父親の複雑な思いがやんわりと伝わってきます、と記しています。

これを読んで天啓のような思いがしました。義務教育を終えて、自らが志望する高校を選定することにこそ、「親子」の関係から、「親」と「子」の関係に変化する第一歩だと気付かされました。我が子の高校受験、志望校の選定に当たっては、言葉通り本人の意思を尊重し、父親とも相談して決定しました。それから後は生徒からの進路相談に際しても、「親子」から「親」と「子」になるときの話を受け売りに、「本人の意思を尊重する」ことを説いてきました。以来、「新しいふれあい社会」は私の愛読するところとなりました。私的生活では、同居する姑の認知症が増悪して、終日見守り介護を要する状態になったため、一家の主婦として、教職を退いて介護に当たっています。介護のために退職することはできても、子育てを退職することはできません。まして「親子」から「親」と「子」になる青年期の子どもの母親として、その思いは強いものがあります。　現在の、「1 年生になったら…」をもう一歩進め、青年期の問題について年代を追って教示していただけませんか、ひとりの市民として心からお願いです、と 1 時間余に及ぶ、真摯で熱い要望でした。

聴かせてもらっていて、胸に迫るものがあり、目頭が熱くなるものを覚えました。その思いを早々

に編集室に伝えると、「市民が市民を支える社会」をめざす団体として、一市民を名乗っての意見には深く感謝して、要望には能う限り応えなければならない。来月号はページ数を増やしてでも、実践しようではないか、との即答がありました。書き手としては、改めてその重さを感じました。

青年期とは子どもから大人へと移るまでの期間を指します。親への依存から離れて、社会の中へ自分の足で歩み始めるまでの過程と考えられています。年齢で表せば、親への反発が起こる 10 歳ころから、就職や結婚で終わる 25 歳～30 歳までの、まさに「親子」から「親」と「子」になる、親別れ、子別れのときです。この期には、その年代に応じ 5 段階の発達段階があり、それぞれ体や心の発達、家族や友人との関係、社会との関わりが大きく変わって、成長していきます。各段階に沿って、学んでいきたいと思います。

前青年期（9～12 歳）　およそ小学校高学年の頃。「前」青年期ですから、厳密な意味では青年期に入らないのですが、第二次性徴が始まる重要な時期です。女子は乳房が発達し、陰毛も生え始め、初潮が起こります。体つきも骨盤が発達して、臀部にも脂肪がつき、全体に丸みをおびてきます。男子も髭や陰毛がうっすら生え始め、声変わりも起こり、精通を経験する子も半数近くになります。この体つきの変化を「さなぎから蝶へ」とも例えられています。

こうした「体の変化」は、当然「心の変化」を呼び起こしますが、男女の区別についていけない子どもも出てきます。体の変化が遅れている男子は、誰にも話せないまま、不登校やひきこもりに陥ることがあります。女子の場合、大人にはなりたくなくて、突然に赤ちゃん返りをして甘えたり、逆に男の子には負けじと、おてんばになったりすることもあります。いずれも心の揺らぎによる、両親にも仲間にも言葉では言い表せない心境と考えられます。

体の変化と心の変化のアンバランスから現れやすい精神的問題や行動上の問題は、親子の間にもギクシャクした問題を生じさせます。その問題も激しさもさまざまですが、特に多くみられるのは、学校であったことを、何でも母親に話すことが少なくなったとの訴えです。母親の目から見ると、体つきだけでなく、心も変わってしまったと訴えます。特に男子の場合は、あれこれと尋ねると、かえってうるさがって、反抗的な言葉を浴びせたり、暴力的になることも決して少なくありません。女子の場合は、拒食症や過食症、時には抜毛症などの精神科的な症状さえ見られることもあります。いろいろ尋ねても、心のうちを語ってはくれません。実はそれらは、本人自身もよくわからない、「心の揺らぎ」だということです。

「体の変化」は否応なしに男女の区別を明確なものとし、同性の仲間との親密感を高めます。男女それぞれの不安を互いに鎮めようとして、男女に分かれて集団行動をする傾向がみられます。その仲間たちとの関係は、親との関係以上に、互いに思いやる友情の方が大事なことになります。
親への秘密も出てきます。その秘密の多くは、信頼する仲間たちの間では共有されます。これらのことは、ご自分も通ってきた過程として、穏やかに受け止めている親も多いことでしょう。しかし、この時期のことを、多くの大人が忘れてしまっていることもまた事実です。動揺している子どもの「心の変化」に狼狽してしまった相談も少なくありません。この時期はギャング・エイジなどと、呼ばれていますが、又の名を「中間期自立期」として、親ばなれのための自信を身につける上で、大切な時期であることを忘れてはなりません。

青年期前期（13 歳～15 歳）　およそ中学時代です。性ホルモンの増加によって、急激な成熟がみられるときです。男子は髭が生え、射精を経験します。女子は大方全員が初潮を迎えます。

男子も女子も体の変化をきっかけに秘密を持ち、親から自立した自分を感じ始めます。仲間とは、秘密を共有し、認め合う関係からジェンダー・アイデンティティを形成していきます。特に男子の場合は顕著で、男性ホルモンの働きで性的欲求が高まってきます。スポーツなどで発散することもありますが、昨今は社会に蔓延している性欲を刺激するテレビ、雑誌にも興味を持ち、同性の仲間とこれらのものを交換し情報を交換することがあります。

私共の相談室にも、この期の男子の性についての相談がありますが、印象的な一例を挙げると、「中２の息子の部屋に、いかがわしい雑誌と、自分の汚れたパンツを、本箱の裏に押し込むように隠してあるのを見つけました。あまりのことに仰天してしまって、どうしてよいかわかりません。こんなとき母親としてどうすればよいのでしょうか?」と息もきれぎれの涙声の第一声でした。
正直に言って、私も一瞬たじろいでしまいました。一息入れ、「ご心配の程はよく分かりますが、ここで考えてみてください。もし、お母さんが感情のままに息子さんを責め立てたら、息子さんは開き直って、自分の留守中に部屋に入り、本箱の裏にまでいじったことに、怒りをぶつけるのではないでしょうか。そのとき、親子の間に取り返しのつかない亀裂が入ってしまうのではないか、と心配になりました。ここでは、いかがわしい雑誌のことは脇に置いて、汚れたパンツにだけ焦点を当て、今日はお掃除しようと思って部屋に入り、汚れたパンツを見つけ洗っておいたわ。男の子のパンツは特に汚れるものだから、さっさと洗うことが大事ね。よごれは日が経るにつれて、黴菌も増えるから、脱いだら洗濯場に出しておいてね、くらいに留めておいたらどうでしょうか」と伝えました。

お母さんはしばらくは黙っていましたが、急に明るくなって、「そうですよね。女の子は初潮があると、お赤飯を炊いてお祝いするのに、男の子は精の射出の初体験は、本人にとっては、驚きでしょうが、誰にも言えずに過ぎてしまうのですよね。友達とは話し合うのでしょうか」と私も思い付かない答えを出してくれ、「聞いてくれてありがとう」と言って、電話を切りました。若い体にうごめく性の衝動と、熟さないが故の激しい思いと迷い、それを見守り成長を支える大人として、教えられた思いがしました。

男性も女性も、この時期に大切なのは同性の仲間の重要さです。仲間と言っても不特定多数の、友人ではなく、ある特定の「親友」というにふさわしい、「同性の友人」ということが大切です。「男らしさ、女らしさ」の自意識、ジェンダー・アイデンティティの獲得は、この時期になされるとも言います。親が自分たちの男らしさ、女らしさを押しつけると嫌われます。さなぎから蝶への例えで言えば、まだ飛べない蝶が親の手の上で、バタバタと羽を動かし飛ぼうとしている状態です。親は危ないからと言って、握りしめたり、逆に早く飛び立たせようと、跳ね上げてはいけません。ただ、手から落ちないように手を広げて、微妙な関係を保ってあげることが大切です。

それは、ひとりジェンダー・アイデンティティにとどまらず、「親別れ、子別れ」全般に対して、心しなければならないことで、身近に問われるのが、高校入試に当たっての対応です。

私共の相談室にも、「偏差値による判断で、学校側から志望校のランクを下げられた」「本人と親の間で志望校の相違から、家庭暴力まで招いてしまった」「滑り止めで受けた私学が不合格になり、もう高校にはいかないなどという。高校だけは出ておいた方がよいか」など、複雑で深刻な問題も寄せられましたが、本人の意思を尊重した家族の話し合いで、解決しています。

青年期中期（16 歳～18 歳）およそ高校時代。体の成熟は概ね終わり（骨の伸びが止まり、成長の終了を示す）、自分自身の第二次性徴、体の変化も受け入れることができるようになります。性別が明らかな男性として、また女性として安定してきます。「さなぎから蝶へ」に例えれば、親の

手から羽ばたき、かなりの距離を飛べるようになったと言えるでしょう。行動範囲も、それに伴って知識や判断力も飛躍的に伸び、この期の終わり頃には選挙権も得ます。一方、自らの肉体の強さや美しさを自慢、権力を笑い、秩序を無視、両親との離別を試みます。まるで、うぬぼれの極致のようですが、このような態度は、実は自分の弱さと向き合うことを避けているからです。

この期の青年には、アイデンティティ（自己同一性）の確立と言う、課題が与えられています。同一性とは、「これが自分だ」という自己像を意味します。生まれて以来、人は家族や学校、社会、集団の中で、さまざまな同一性を形成します。〇〇家の子ども、◎◎学校の生徒、△△会社の社員など、集団との関係で安心感に支えられ、共通の価値観を持ち、役割を担うことによって、次第に出来上がっていきます。これらの同一性をまとめた人格的な同一性を自己同一性と呼んでいます。

青年期中期は、所属する集団の同一性を取り入れたり放棄したりしながら、社会の中であるべき自分を確立していく大切な時期です。青年期前期が同性の友人づくりが大切だったことに対して、この期の青年は、ひととき同性の友人から離れて、自分一人になる傾向が出て来るのが自然です。親からみると、ぽつんと一人でいる姿を垣間見て、心配して相談に及ぶことさえあります。しかし、孤独の中で大切な何かを掴もうとしているのです。それは、「自分とは何か」という、漠然とした、或は抽象的な問い掛けを繰り返すことで得られるもので、アイデンティティの核になるものです。より現実的な原寸大の自分を見つけるまでに、心の中で著しく現実離れした大きな自分を感じたり、逆にとても小さな自分を感じながら揺れ動いているのです。

アイデンティティの形成にまつわる困難もあります。不登校やひきこもりとして、表出されます。青年期初期の不登校やひきこもりは、クラスメートや教師に馴染めないなどといった、環境からの影響が強いのに対して、この時期の不登校やひきこもりの場合は、環境からの具体的なストレスを見出しにくいのが特徴です。学校で何かあったのか聞いても「別に」と言うだけです。

あまり長い場合には、心配になります。アイデンティティが見出せずに、ひどく苦しんでいたり、そのプロセスにくたびれてしまった結果かもしれません。或る日突然に家庭内暴力というかたちで表現されることもあります。こんな時は迷わず、専門家（精神科医、心理士）にご相談ください。

それとは逆に、いささか身勝手な理屈をつけて、尊大とさえ言える自己主張も見受けられます。Ａさんは、中高一貫の有名校に通い、国立一流大学をめざし励んでいました。ところが２年になり、志望大の入試合格に黄色信号がでました（進学塾の判定）。塾の欠席が多いことも理由づけられていました。驚いた両親が問い質すと、Ａ君は、「会社では、残業時間が規制されるようになったが、僕たち高校生には勉強時間の制限などはない。学校の授業が会社で言えば勤務時間で、塾の授業は残業になる。僕は残業を拒否して、その時間を有効に使っただけだ。実際には、社会見学をしたり、憲法９条を守るデモにも参加した」と興奮気味に明かしてくれたが、まとまりを欠き、不安気で、自分を振り返っているようにも思いました、と母親は訴えました。

お子さんは聡明で、親の期待を一身に集め、順調に成長してこられたのでしょう。それ故にこそ、おとなへの旅立ちの期、「僕はやりたいことが見つからないんだよ。そんなに期待しないでよ」というサインかもしれません、とのみ伝えました。

青年期後期（19 歳～21 歳）　すでに就職しているか、大学や専門学校に通っている年代です。

青年期中期の中心的な課題となっていた、アイデンティティの形成過程も大方は終わりを告げ、自分の生き方を見出し始めます。いろいろ迷いはあるでしょうが、社会で生きるためには何が必要かを知るようになります。青年期中期にみられた、「独りでいる」ことも少なくなって、

社会のなかで「どのような自分でいたらよいか」が、次第に明確になっていきます。

社会に対する批判力も養われ、政治や世の中の価値観に自分なりの見解をもって、それを社会に向かって、行動で示したり、主張したりします。友人関係も、或る限られた同性の友人とも異性の友人とも等しく安定した関係が維持されます。「ある特定の同性の友人」と断ったのは、青年期前期のところで説明しましたが、この関係が維持されていることは、非常に大切なことで、この時期に現れやすい精神的・行動上の問題について、精神科医によっては、こうした「友人」が持てたか、持てないかで、診断や今後の治療の見通しを立てるくらいです。異性との関係はより深まり、恋愛関係にまで発展することがあります。

こうしたなかで、家族関係も変化してきます。若者は、自分の好みや主張がはっきりしてきて、親たちの文化とは明らかに異なる文化が発展してきます。いわゆる「世代間ギャップ」の出現です。「自分の子どもでありながら、下宿人とでも生活しているような味気なさを感じることがある」と訴える親も少なくありません。

青年期前期に始まったと思われる、非行や薬物乱用などが止められなくなっていることがあります。従前からの仲間から離れて独りがちになる、このような状態が続いているようでしたら、なおさらです。迷わずに専門家に相談してください。

更に、拒食や過食、青年期境界例、統合失調症など、心の病気も明確になるのもこの頃です。親は子どもの異常な言動に驚いてしまいます。漸く成人を迎えた子どもの反乱に今までの苦労は無駄だったと思い、裏切りすら感じて怒ります。子どもの異常な言動を、「心の病気」と思わず、「社会の道から外れた悪」だと考えてしまいます。子どもの行動を危機状態にあるとは認めず、自分が不安に支配されたくないからです。配偶者の責任にして、夫婦喧嘩をすることもあります。親が自分自身に真っ直ぐ向き合うことが、子どもの行動の意味を知ることのきっかけにもなります。家族で危機に対応することが、何よりの治療となり、癒しとなります。

この期に特徴的ともいえる病態が、この期のすべてにみられるわけではありません。危機の程度も期間もそれぞれ異なるし、発症もこれ以前にも、遅い場合も、回避できる場合もあります。むしろ、青年期を通り過ぎるコースの一つとして考えられています。病気の初期に見える状態でも、家族や友人の手助けや応援により、危機を乗り切れる場合もあります（先に述べた同性の特定の友人のことを思い浮かべてください）。

他にも、この期に特有の病気があります。人前でひどく緊張する、あらゆることに潔癖すぎる、体から変な匂いが出ていると思い込む、自分の視線が人に不快にさせると思いこんで悩む、などがよく聞く例です。いずれも自意識が高すぎることによるものです。程度と期間の差こそあれ、多くは大人になるうちに自然に癒されていきます。

一方、心理的な混乱が、そのまま行動として現れ、家庭内暴力、弟や妹に対する執拗ないじめ、非行、家出、ひきこもりなどが見られたら、迷わず、早期に専門医による治療を受けてください。早期発見、早期治療は、心の病気も体の病気も同じです。治療を受けつつ高校に通い、大学に進み、今は社会人として、明るく働きながら、婚活をしている女性を知っています。

○「授乳中のＹよりときて 婚活中のＨ」と返す 夕べひととき　　（Ｔ大同窓会報より）

後青年期（21 歳～30 歳）　「後」青年期ですから、厳密には青年期には入らないのですが、「前」青年期を取り上げた以上は、5 段階の最後の発達段階として考えたいと思います。

近年、大人社会で一人前として認められるためには、高度で専門的な知識を獲得し、その知識を活かす技術を体得するには、長い期間が必要となってきています。そのため現代社会は、「青年期」を延長、30 歳くらいまでと考えるようになりました。若者が一人前の「社会人」になるには、社会の中で、

自分にふさわしい場所や役割を見出し、子どもの頃に夢見ていた豊かな自己像と、大人社会との折り合いをつけなければなりません。しかし、自分のあるべき姿を確立するのは、容易ではありません。多種多様な可能性が開かれているなかで、自分の道を選ぶためには、十分な期間が欲しいのです。

現代社会は、「後青年期」の若者が「社会人」になるための期間を与えています。社会的遊びを繰り返し、自分の生き方を発見するまでの期間です。この期間を「モラトリアム」と呼んでいます。

モラトリアムは、国や時代によって異なってきます。社会が経済的・文化的に安定しているほど、モラトリアムの期間は長くなります。経済的・文化的に余裕があればこそ、成年にモラトリアムを与えることができるということです。

ところで、日本はモラトリアム人口が非常に高い上に、その期間も長くなっています。大学に何年も籍を置き、なかなか就職しなかったり、やっと就職しても「自分に合っていない」などと言ってすぐに辞めてしまうなど、一人前の社会人になり切れない成年たちです。年齢的には成人ですが、心理的には「青年」といってもよいでしょう。先の社会的要因に従うと、社会が安定しているが故に、社会的ストレスにさらされないためかもしれません。わが国特有の現象と言う人もいます。

こうした若者のなかには、モラトリアムを決めこんでいるだけで、実態はモラトリアムでない者も少なくありません。積極的な自己開発を試みることもなく、ただ単に大人にはなりたくなくて、モラトリアムを隠れ蓑として逃げ回っているだけなのです。こうした若者に共通してみられる特徴は、成熟し安定した人間関係が維持できないことです。大学生活では、会社などと違って自分にとって緊張を強いられることのないような関係のみを選ぶことができますが、実社会ではそうはいきません。彼らにとっては、モラトリアムは、単に現実から逃避するための期間であるといえるかもしれません。過去を辿ってみると、かなり以前からその兆候が見られることが分かります。この期間ならではの、「心の迷い」であることをうかがい知ることができます。

この期に特有の用語もあります。 学業から引きこもればアパシー症候群。 大人になりたくないと、ピーターパン症候群。転職を繰り返せば青い鳥症候群。女性が男性に救済されたい願望が強ければシンデレラ・コンプレックスなど。その多くは青年期の心理的な迷いに焦点を当てたものです。症候群と言うと、いかにも大変な精神科疾患のように思いますが、それを経験した大半の人は、家族や友人の応援によって、「青年期のほろ苦い経験」として後遺症もなく過ごしておられます。むしろ、「症候群」などと名のつかない、いわれない「ひきこもり」が心配されます。その根には神経症や青年期危機、統合失調症などが隠れていることがあります。迷わず精神科に相談するなど、適切な対応が望まれます。

いろいろ書き連ねましたが、「後」青年期の多くは、「モラトリアム」の名を貶さないように、高度の知識を身につけて、社会的な役割を担い、自らの人生をつくる時期を迎えておられることを強くお伝えします。そもそもモラトリアムとは、戦争や災害、政局不安などの非常事態が起きたときの金融用語ですが、この用語を精神医学に導入したのは心理学者のエリクソンです。「成長するためには、立ち止まる時期が必要である」と説いています。

青年期再考　「青年期」というと、「子どもでもない、大人でもない時期」と連想するのではないでしょうか。では大人と子どもは、どこで線引きをするのでしょうか?　身近な人に尋ねると、多くの大人は、「成人式を迎える 20 歳」と答えました。続いて、「高校を卒業のとき」「大学を卒業のとき」と、就職して、収入を得る頃に焦点を当てて考えるむきもありました。

改めて、清水和子さんからの「親子」から「親」と「子」になるとき、「青年期の各年代の問題」という、問い掛け、真摯な要望の重さを感じました。

「青年期」については、法的にも児童福祉法で 18 歳、少年法、民法では満 20 歳と定めており、一定しません。なお民法には、男は満 18 歳に、女は満 16 歳にならなければ、婚姻をすることができないと規定しながら、未成年者が婚姻したときは、その時点で成人に達したとみなす、と規定されています。歴史的に見ても、文化や時代によって大きく左右されていて、はっきりした定義は見当たりません。

青年期について思い進めていくうちに、「思春期」と言う表現にもぶつかりました。思春期とは、「春を思う時期」と読めます。大きな辞書で思春期を引くと、「生殖器官が成熟の域に達して、男女に特有の第二次性徴が現われ、生殖可能となる時期を、思春期または春期発動期という」と記されています。性的に成熟して、子どもを作れる時期と言うことでしょう。

ところで、子どもの体の成熟は性を含めて著しく早く、女の子が初潮を迎えるのは、早い子では 9 歳～10 歳と言われています。男の子も同じ頃に、精通を経験すると言われます。その一方では、社会心理学的成熟には、長い時間がかかるために、体と心の発達にアンバランスな状態が生じて、混乱を招きます。それは、「体の変化」「心の状態」「家族との関係」が絡み合いながら、後々に各年代を経て、精神的に自律した社会人になるまで続きます。それは即ち、「青年期の混乱」ではないでしょうか。まさに激動期です。

それは、子どもを育んできた親世代も同じです。「おとなへの旅立ち」にむけて頑張る子どもと、「健全なおとなとして巣立って欲しい」と願う親の願いは、同じはずなのに、その中で揺れ動く、互いの波長が合うとは限りません。どちらかといえば逆に作用することがあります。

成長する家族（激動期に子どもの青年期が…）　家族とは、ふたりの男女がそれぞれの家庭から巣立って結婚、新しい家庭を持った時に始まります。それを出発点として家族は成長を始めますが、その成長の過程で、子どもは青年期を迎えます。ここが重要なことです。青年期は心身共に子どもからおとなへと、質の変化が起こるときであり、社会への旅立ちを考えると、心の揺れは当然で、激動のときです。いわば、子どもの青年期は、家族にとって、今までの流れのなかで、さまざまな問題が集約されて起きてくる、「家族の成長の段階での青年期」ともいえるのではないでしょうか。子どもの青年期は、当然のこととして家族との関係性の変化をもたらします。一人前のおとなとして、社会に踏み出すには、親の保護にばかり頼ってはいられません。しかし、その一方には、言い知れない不安があり、他方には、そうあらねばならないという気負いがあります。この期の家族の役割は、子どもの自立と責任とコントロールを、今までの関係を損なうことなく、規定し直すことです。それを親と子の双方が認識し、自覚することが大切です。

相談室で電話を通して、様々な悩みを聴いていると、家族のメンバーは誰しもが心の底では愛し合っているのに、どうも歯車が合わないと感じることがあります。けれども、問題が起きたとき、家族を救うのは、結局、家族メンバーひとりひとりの心の底に流れている愛情と、互いに支え合う気持ちなのです。ところが、自分の中にある、家族思いの気持や愛情にさえ気付かないのです。

私ども相談員は、それぞれの個人や家族の心配ごとを傾聴することで、自分たちが持っている、家族への愛情に気付いて、自分たちの力で解決できるようにと、お手伝いしているのです。勿論、心配ごとが起きたときには、治療者や相談員を利用・活用して解決することが大切です。その知恵を持っているのも家族です。

ここでもう少しお伝えしておきたいことがあります。青年期は、今までの成長のなかでの、さまざまなことが集約されて、問題が起こりやすい、激動のときと述べてきました。そして家族もまた、その成長のなかでの激動のときとも述べてきました。そうなると、問題が起きてからでは、手遅れ

ではないかと、考えてしまう方もおられるかと思いますが、決してそうではありません。むしろ、青年期に課題の達成を試みるなかで、挫折に出合い成長するのです。問題解決する過程で成長し、周囲の人びとも、子どもを見守りながら、子どもから学ぶよき環境のなかで、社会全体が、家族が、より豊かになっていくように思います。有名な家族療法家、ジェイ・ヘイリーの言葉を少し変えて、「家族の危機は飛躍のときであり、家族を救うのは、お互いの心に流れる愛である」と言う言葉を贈りたいと思います。

最後にもう一言。初めに「青年期とは子どもから大人に移る期間」と記しましたが、一歩進めて、「青年期とは、子ども時代の集大成であり、おとなへの旅路の最終段階である」とさせてください。

青年期について「体はおとななみでも、心は子ども」の 10 歳頃を「前青年期」と位置づけ、「年齢は成人だが、心理的には青年」の 30 歳頃を「後青年期」と位置づけて考えてきました。この間、20 年の長きに及びます。人生百年の長寿社会とは言え、人生の五分の一になるこの期を、どう乗り超えるかは、その後の人生を左右する重大な問題であり課題です。その年代の子どもを、若者を、育んでいる、伴走しているのは、他ならぬ家族です。家族もまた、「家族として成長する青年期」と言ってよいのでしょうか。或は「親子」の関係から、「親」と「子」になるための「青年期」と断言できるのではないでしょうか。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前 9 時～午後 9 時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈発達段階で獲得すべきこと〉青年期の心と体の発達段階に応じた特徴をあげ、よく理解できるように詳しく記述しているので、親や子どもに関わっている人には養育の指針となる。心と体の発達過程で様々な変化を伴いながら成長していく子どもたち、冒頭の部分での教師の指導事例で自立を促すための進路決定における親の関わり方のあり方は、子どもにはその年齢での発達段階で獲得しなければならない課題があり、その課題を獲得して次の発達段階の課題を解決しながら成長していくことを示している。しかし、その発達段階の課題を獲得しないで成長していった場合は、後々、その子どもにとって大きな問題として現れることも多い。まさに、発達段階で獲得しなければならない課題をまとめていただいたことは子どもに関わる人にとって大きな力添えとなろう。

心の発達は情動の心（０～3 歳）と 3 歳以降の意識に上がる心がある。子どもの発達過程に虐待やいじめがあると子どもの心はさらに難しい困難を強いられることになり、強い虚無感、不安感、抑うつ感、自己否定感などのトラウマを背負い込み生きづらさを抱え込むことになる。重い場合は精神障害者となり人生を送ることになる人もいる。青年期の発達段階は青年期危機とも言われるとおり、幼少期よりの成育歴での安心・安全、大事にされているという心、発達段階の課題をいかに獲得させるかにかかっているように思う（藪下敏　精神保健福祉士）。

〈凄まじい青年期〉◆その嵐から子供たちを守るために、学校教育の以前に、基本的な躾を教える場である家庭教育の重要性、規範教育の大切さを痛感しました（h）。（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

新しいふれあい社会　　認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会
情報誌（毎月 2500 部発行）
事務局　我孫子市湖北台 6-5-20
平成 29 年 10 月発行（第 43 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

ひきこもり問題の考察

榧場　雅子
（臨床心理士・精神保健福祉士）

8 月号で、「青年期の体と心の迷い、そして家族」の特集を組んだところ、その反響は大きく、特に「いじめ問題」「ひきこもり問題」について記してほしいとの要望が数多く寄せられました。これに応え、先月はいじめの問題を考えました。今月はひきこもり問題を考えたいと思います。

最初に県立高校の定時制のＳ教師の実体験を踏まえた真摯な要望を一人称のまま紹介します。ふり返ると、県立高校 2 年に在学中のことです。とりたてての特技もなく、部活動も名ばかりで、親しい友人もなく、平々凡々と過ごしていた私は、学級委員に推されて、引き受けてしまいました。ところが、受けてから気付いたことにクラスはまとまりがなく、みんなが勝手放題で、注意すると、「いつの間に先生の手先になったのだ！」とからかわれる始末でした。すっかり自信を失い、遂には学校にも行けなくなり、自室にひきこもってしまいました。心配した母親は父親とも相談して、メンタルクリニックに行こうと言ってくれたが、聞く耳持たずの状態でした。困り果てた母親は、Ｎ心理療法研究所を訪ね、相談していました。Ｎ先生は経験的に言うと、この年代のひきこもりは、本人が治療の場やカウンセリングに訪れるのは、少ないものです。それは自分の精神状態の異変を否定しているのです。しかし頭の片隅では、「困ったことだ」と思っているはずです。お母さんが、私共に相談したことを正直にありのまま伝え、一緒に行ってみないか、と軽く勧めてみてください。始めは否定したり、無関心を装っているかもしれないが、或る日突然、「僕も行ってみようかな」と言い出すこともあります。やんわりと、根気よく誘い続けてみてください、と言われたそうです。私は、先生のその作戦にまんまと乗ってしまいました。ひきこもってから 1 年半にもなりますが、かつてのクラスメートの誰それが、大学に進むとか、就職するなどの噂が頻りに耳に入ってくると、尻に火がついたような苛立ちを感じ、母に従ってＮ先生を訪ねました。

私は、「高 2 の夏からひきこもって 1 年半、高 1 を入れると、失った時間は 3 年になります」と訴えました。すると先生は、いとも簡単に「それなら、その 3 年間を長生きすればいいじゃないか。君は、ひきこもっていた間を、“失った時間”と考える力を持っている。その力をもってすれば、十分可能なことと思うよ」と言いました。この言葉に発奮し、定時制高校で学び、大学二部に進み、教師の資格を取りました。ところが教師仲間から何かにつけ夜学出と言われました。私は自ら希望して定時制の教師になりました。定時制は全日制の環境に馴染めず退学した生徒、非行行為により、退学を強制された生徒など、多くの問題を抱えた生徒たちの受け皿になっています。そのために、ひきこもりを体験し、モラトリアムの恩恵も蒙り、27 歳にしてようやく教師になった私にとって、適職に巡りあえた思いがしています。その私を励ましてくれたのが「新しいふれあい社会」でした。私にとっての、この上ない教科書として、永久保存とし、座右の銘とさせて頂きます。その上で、欲張ったお願いですが、大きな社会問題になっている「ひきこもり」について広くご教示頂ければ幸いです。この問題に悩む、親や教師、本人のためにもぜひお願いします、とその熱意が無機質な電話を通して、びりびりと肌に伝わってくる思いがしました。

「ひきこもり」を心理・精神医学用語辞典で調べると、退いて内にこもることを意味する複合語。自分の殻に閉じこもり、現実の世界から離れ、他人や外界との接触や交流を拒む状態と説明。この状態は「自閉」と同じ意味に用いられることがあり、精神障害者にみられる行動様式の一つである。このような状態も、その人の生活史のなかで、より安定しようとして、身につけた行動様式の場合もある。ひきこもり状態の強い患者は、現実に直面することを避けて、自分の内的世界にこもり、寡黙（無言症ともいう）で人を寄せ付けない冷たさと映る場合が多い、と記されています。長々と要旨を転記しましたが、それだけに問題は複雑で、厄介な状態像だということです。

この問題に答えるために、問題提起者のＳ氏の実体験の経緯に焦点を当てて、考えてみました。Ｓ氏の「ひきこもり」の経緯を改めてなぞってみると、幅広く深い問題提示と教示を覚えます。

① ひきこもりが出現した青年中期の友情関係の在り方。純一無難な性格、この期に課せられたアイデンティティの確立と課題の葛藤
② ひきこもってしまった我が子に対する親の対応と努力
③ 相談・指導に当たった医師の対応と、家族との見事な連係プレー
④ ひきこもりから立ち直ったＳ氏の成長ぶり
⑤ 現在を踏まえた上での将来の展望

こう書き出してみると、青年期の「ひきこもり」も、この期に与えられた課題達成を試みる中での挫折であり、問題解決の過程で成長し、豊かになっていくことの一例ともなっているようです。

しかし、「ひきこもり」を現代社会の深刻な問題として捉えた上での問題提供であってみれば、これで大団円として終わらせるわけにはいきません。

もう 2 年余も前のことですが、忘れる事の出来ない事例を告白しなければなりません。午後 8 時過ぎて、「名前はＯとイニシャルにしてください。即答は得られないとは思いますが」と切り出し、　長男は現在 21 歳。高校 2 年生のときに不登校となり、お決まりの自室にひきこもってからすでに 5 年になります。ひきこもっているだけではありません。これもお決まりでしょうが昼夜逆転し、家族とは顔を合わすことさえありません。そればかりか、ときおり「わーっ」とか「えーっ」など、奇声を発して驚かされます。私は気持ちを落ち着かせて声をかけるのですが、全く耳を貸しません。父親は工学博士で大学教授です。長男のこの状態を相談しても、「あいつは頭もいいはずなのに、こんなことになったのは君のせいだ」と私を責めるのです。次男は私立の進学校の高校 2 年生で、長男が発症した年齢ですが全く問題ありません。親として、次男に期待するしかないのでしょうか、と言うのが訴えの主旨でした。

受け手としては、最後のフレーズ「長男が駄目なら次男に頼るしかないのか」と言うところに、少なからぬ拘りを覚えましたが、それにはふれず、5 年に及ぶ母親の心痛を思い遣り対応しました。「ご心痛の程をお察しします。その上で正直に言って、ご子息の心の健康を専門医に相談されてはいかがでしょうか。実は、私は最近まで精神科の病院で、カウンセラーとして勤務していました。その経験から言うと、ひきこもり状態の青年は、自分から進んで診療に訪れることは少ないので、ご家族（主として母親）がしばらくは治療者の許に通って、共に対策を考えるのがよいようです。治療者は、ご家族をファストクライエントとして対応し、ひきこもっている青年の状態をお聞きして、明確な精神疾患の可能性を否定していきます。心の病気の多くは、外来治療で治るものです、と率直に意見を述べ、知る限りの情報を提供しました。

その後、Ｏさんからは何の連絡もありません。こちらから問い合わせるすべもありません。Ｓ氏の体験と較べて、明暗を分けるような予感めいたものを覚えて、例えようもない不安に襲われます。

親と子の対話がないまま、時だけが徒らに過ぎていくことになると、それはまるでローンの利子が増えていくのに、返済しないままに、それを考えもせずに過ごしていることにも例えられるのではないでしょうか。未払いのローンの利子は当然のことながら次世代に懸かってきます。膨大な額になってしまった利子の返済を、次世代は黙って引き継がなければならないのでしょうか。マイナス遺産の相続放棄をするというのでしょうか。「長男が駄目なら次男に期待するしかない」と言われ育った次男も、これに同じ。ひきこもったままの兄の扶養義務を引き継ぐのでしょうか。やはり、ご自身の生活の安定のために、扶養義務の免除を願うのでしょうか。

そうなると、親亡きあとの長男の生活のケアは、誰がするのでしょうか。生活保護？障害年金?いずれにしても、こうした人たちが増えると、国や地方の福祉行政や財政までを揺さぶりかねない問題になってしまうのではないでしょうか。こんなことまで考えてしまいました。

小中学生のいじめを原因とする、不登校の延長線上にある「ひきこもり」については、教育者を中心に識者の見解などが問われ、マスコミなどでも取り上げられています。ところが、高校生以上大学生、大学院生、更には就職した後も、将来を見通すことが出来ずに、いわば「社会人」になることを拒むような「ひきこもり」が、今日の社会問題です。この手の「ひきこもり」の成り立ちは多様ですが、これから生活していく上での将来の目標を見失ったような、思い込みをしている人が多いのに驚きます。当人と面会すると、「学校が自分の性分や才能に合わない」「本当は〇〇高校に行きたかったのに親に反対された」「××大学△△学部に行きたかったが親が許さなかった」「就職したが自分の才能を活かせる場ではなかった」などと、他者との関係がうまく取れないのは、親の責任や相手が自分を受け入れてくれないからだなどと、責任を転嫁する人が少なくありません。

親に話を聞くと、中学半ば頃までは成績もよく、素直で何の問題もなかったが、あるとき唐突に、友人に成績を追い越された、きょうだいの誰かが、めきめきと成績を上げて親を喜ばせた、などの理由で、人が変わったように暗くなったというようなエピソードが語られています。

担任の先生や大学や職場での評判を聞くと、申し合わせたように、几帳面で真面目、その一方で力強さに欠け、困難を避ける。自己主張に乏しく、自分の持ち味を生かせなくなると、その場から逃げる。いったん逃げ始めると、他人の助言には耳を貸さず、付き合いにくいタイプと言います。

精神科医で家族療法の長老である下坂幸三先生は、ひきこもりは、自分のありのままの姿を世間に露わになることを防いでくれる一面があると考えられる。その一方で、「うまくやっている」と本人が見做しているきょうだいに対して、内心では深い嫉みを抱いており、彼（彼女）に対して、「親から偏愛されている」という思いが拡大されている場合がある、と分析・指摘しています。

更に先生は言葉を続け、こうした青年は自分の不安定な精神状態を自覚しないか、否定している場合が多く、ひきこもり状態が何年にも及ぶことが少なくありません。ごく一時的な場合は別として、ご家族が「自分たちの問題」として私共の許へ足を運んでください。うつ状態では薬物がよく効く場合もあります。適応障害・神経症の範囲であれば、カウンセラーに相談するのもよいことです。本人が自覚して診療に訪れることは少ないので、当分の間は家族（母親）が治療者の許に通って、共に協議すべきです。解決の道は必ず開けるものです、と述べています。

最後になりますが、筆者も意見を述べるべきと考えました。所見と言うにはあまりに未熟ですが、相談員として実際に出合った、ご本人やご家族との触れ合いの中で学んだ教訓です。

ひきこもりについては、今日的な大きな社会問題でありながら、事の性質上、統計的な数値がとりにくく、識者の見解やマスコミの扱いも表層的で、無難に述べられていることが多いようです。

こうした中で、机上の空論ではなく、日常的に、実際に相談・支援に当たっている、いわば実務者としての感想・意見として受け止めてください。

ひききこもりの初期、大方の親が子どもにかける言葉は、「どうしたの?」「何かあったの?」など、ひきこもりとなった理由を聞く問いかけです。それに対して子どもの方は、説明どころか、ムッとして反発の態度をあからさまにするか、全く無視したまま自室に籠ってしまうというのがこれまた大方の成り行きのようです。お母さんの方は、ぐっと我慢して 1～2 カ月を経て、声掛けの方法を変えて、「お腹すかない？」「何か欲しいものない?」などと、優しい声で話しかけます。しかし、子ども方は相変わらず反発か無視。子どもは会話のきっかけとなるべく親の心のうちを、すっかり見抜いているのです。親はがっかりしてしまい、「何を言っても無駄だ。仕様がない」と思い決め、互いに会話もないままに 2 年、3 年…と経てしまいます。状況はさらに悪化し、家庭内暴力に至ることもあります。こんな事態に至るまで、親しく相談できる血縁、地縁はなかったのでしょうか。電話をくださった相談者（すべて母親）は、「聞いてもらえただけでよかった」と言っています。私の方も、「ここでよければ、いつでも電話をください」と伝えています。そして、「お子さんには、“おはよう”“おやすみ”の声かけだけは忘れないでください」と、つけ加えています。お母さんから「ふれあいが大切なんですね」と言われ、救われた思いがしたことがあります。

「ひきこもり」は広い意味での「心の病」です。心も風邪をひきます。風邪は万病のもとです。以前は祖母や母親、近隣の人に相談していた子育て不安や心配を、解決できなくなっているように、「心の問題」も地域の中で解決できなくなっています。これを受け、精神科医がビルの一角を借り、メンタルクリニックなどと、その名もやわらかに、開業するようになりました。心の健康のために、専門家との相談が必要であることが広く認められるようになり、敷居も低くなったせいでしょう。前述した下坂先生も、ひきこもりは、家族が「自分たちの問題」として治療者のもとに通い、共に協議すれば、解決の道は必ず開けるものです、と力強く、自信をもって述べています。

親が自分と真向かって考えることが、子どもの行動の意味を識ることにつながります。「家族が一緒になって危機に対決すべき大切な時期」を逸すると、事態は悪化の一途をたどるばかりです。経緯は長期化して、本人にも、家族にも、ひいては社会的にも、困難な状況をもたらします。先にＯさんの件で、将来を思い遣っての心配と述べたのも、この辺のこととご理解ください。

「市民が市民を支える社会」をめざす当会の活動の一助として、「こころの相談室」が設けられていることに、改めて思いを致し、「新しいふれあい社会」の広がりを心から念じています。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前 9 時～午後 9 時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈支援者の立場になる〉◆４月からひきこもり・精神障害の当事者及び家族へのアウトリーチ（相談訪問）を始めた。小・中学校でいじめに遭い、精神障害者になった事例が多いことに驚かされる。いじめによるパーソナリティ障害である。本人は怒り、不安、イライラをかかえてひきこもりに陥っている。そして、自己同一性が獲得できずに自分の生き方がわからないで困っている。「大事にされているという心の実感」がなく、レジリエンス（心の弾力性）が弱ければ、さらに回復が難しくなる。◆「自分のことを理解してくれない」「言っても駄目だ」と思うと、子どもは怒り・不安・イライラをためて過ごすことになる。困難に陥った時、子どもは最初の言葉かけで「自分を守ってくれる」「大丈夫だ」と瞬時に判断する。そう判断したら、困難からの回復は容易になる。◆わがまま・怠け者と捉えるのではなく、困難を理解してあげることは、本人の気づきにつながり、それが生きる力に変わっていく（Y）。

独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業

新しいふれあい社会

認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局　我孫子市湖北台 6-5-20

平成 29 年 11 月発行（第 44 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

青少年の自殺問題を考える

榧場　雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

夏休みも終わりに近い８月の終週、ＮＨＫは、９月１日が児童・生徒（高校生以下の在学生）の自殺が異常に高い特異日であることを、過去の実数を棒グラフに示して報じていました。

これに反応して、申し合わせたかのように、小学生、中学生、高校生のお母さんからそれぞれに、わが子の様子をつぶさに語り、いかにも心配そうに電話が入りました。そればかりではありません。高校時代に自殺を図ったことのある青年から、自らの体験を通して、自殺を考えることの愚かさ、将来を見据えて生きることの素晴らしさを語り、後輩への温かな励ましのメッセージがありました。さらに、公的相談機関のスタッフから、いじめを巡り、児童・生徒の自殺問題で、親と教師が互いに鬩ぎ合う現実を目の当たりにする苦慮を明かして、「民間において多彩な相談業務に携わる姿勢」と「自殺についての理論と実際」とに視点を絞っての意見を求められました。

この５つの事例はＮＨＫの報道に刺激されて、８月末日に集中して寄せられたものです。それはそのまま、児童・生徒の希死念慮を考えるべく、与えられた課題であるといってよいと思いました。各事例についての受け答えを正直に記して、一緒に考えたいと思います。

１．児童・生徒の希死念慮

その１　内向的で友だちも少なく、死について異常に関心を持つ小学校６年生の女の子

◇小学６年生の娘は、幼い頃から内向的で、クラブ活動も名ばかりで仲良しの友だちもいません。６年生になってから突然に、「人は死んだらどこへ行くの」「人はなぜ生きているの」などと聞かれ、返事に困ったことがありました。その上、『生と死のかなたへ』などという本を読んでいました。ＮＨＫの報道を見て、この子は自殺を考えているのではないかと急に心配になってしまいました、と８月末日の相談日を待っていたかのような、９時早々の母親からの電話でした。

◆この期の子どもは、内面的なものを考え始め、「生きることの意味」や「死後の世界」などにも思いを寄せるようになります。その意味では、娘さんは成長の過程を辿っていると考えられます。お母さんとしては、「あなたも難しいことを考えるようになったのね」と話しかけて、さりげなく読んだ本の感想を聞いたり、一緒に見た映画やテレビの物語などを話題に、母と子で話し合う時間を持てたらいいな、と思いました。

同時に、この時期は友だちとの関係が大切です。親と子と話し合うと、ともすると親はすべてを見通したような話し方になってしまうのは否めません。クラスやクラブの友だちとの何気ない話が子どもの心を開きます。読んでいる本に心をむけておられることに感心しましたが、お友だちとの関係にも、さりげなく見守ってあげてください。あまり塞ぎこんでいるようなら、担任の先生や、養護の先生に、心を開いて相談されることをお勧めします、と伝えました。

「心を開いて…」ということが大事ですね、と応じてくれました。

その２　受験勉強に疲れた中学生

◇公立の中学２年生のひとり息子。国立大学に進むことを目指して頑張っています。「います」と現在形で表現したのは母親の私の願望であって、本人は、「頑張っていた」と過去形で考えているのかもしれません。実は、机の上のノートの端に、「疲れた、死にたい」と走り書きしてあるのを見てしまったのです。余りのショックで倒れそうになってしまいました。

実は父親は二流どころの私大出で、47 歳になる今も、二流会社の課長どまりです。本人はそれが無念で、子どもには一流の国立大に進ませるよう言い聞かせてきました。中高一貫の私立進学校に進ませたかったのですが、経済的理由もあって、地元の中学に入れました。中高一貫といっても、高校からも受け入れており、むしろ、高校からの方が実力があると聞き、それを頼みに子どもにも言い聞かせてきました。子どもは素直に受け入れ、小学生の頃から懸命に頑張ってきました。成績もそれに応じて、トップクラスを維持してきました。中学生になってからも、それなりの成績を保ってきましたが、2 年になってからは、学校と塾の両立が難しく、成績は次第に右下がりになり、本人も悩んでいました。そんな子どもに、父親は「頑張れ、頑張れ」と、呪文のように言い続け、私もそれを止めようとしませんでした。今、罪の意識でいっぱいです。どうすればよいのでしょう、と涙声での訴えでした。

◆ご心痛の程お察しします。その上で深呼吸でもするつもりで、私の話を聞いてください。
人が、特に若年の子どもが自殺を考えるのは、自分が愛されていることを確認できないときです。例え成績が思うに任せなくても、志望していた学校に合格できなくても、自分が愛されていれば、人は決して自殺などしません。息子さんは、勉強に疲れた或る日、或る時、溜め息をつくように、ノートの端に、「疲れた、死にたい」などと思いの端を書いたのではないでしょうか？　それは、「死にたいほど疲れてしまった」ということではないでしょうか？　その思いを深く察してあげてください。「なぜ死にたくなったの」などと聞くのは勿論のこと、ノートを見たことにも触れず、「疲れているみたいね」と、それとなく温かく、労わり、見守ってあげてください、と伝えました。「死にたいほど疲れたと考えればいいのですね」と復唱するように、明るく応じてくれました。

その３　友だちの自殺をぽつりと告げて、自室に籠ってしまった高校１年生

◇普段は底抜けに明るい高校 1 年の長男。特に優秀ということはないが、中位どころの公立校に通っています。夏休みも事無く終わり、2 学期の始業式に出席して、帰宅早々に「Ｆが自殺した」と言ったきり、自室に籠り出てきません。普段は、「ただいま」と言う代わりに、「腹減ったぁ」と言って、キッチンの椅子に座り込んで食べ物をねだる子が、昼食も摂らずに、自室に籠っているのです。部屋の前まで行って声をかけると、「いま行く」と言って顔も見せません。部屋の中から、プーンとお線香の匂いがするので、重ねて聞いてみると、「Ｆは△△市の住人で、学校も違うが、サッカーのサポーター仲間で、不思議に気が合って、会うのが楽しみだった。そんなＦが夏休みに自殺してしまったと、同じ学校のサポーター仲間のＹが話してくれた。ふたりで線香を一束買って分け、自宅で祈ろうと約束した。この線香が燃え尽きたら行く、と言っただけでドアも開けてくれません。母として、「いてもたってもいられません」との訴えでした。

◆お話を伺った限り、息子さんは順調に育っていると思います。常日頃は明るく過ごしているが、友の死に逢い、心から悼み、祈っておられます。「お線香が燃え尽きたら行く」と言っているので、いつにもまして美味しいお昼を作って待っていてあげてください。母と子のコミュニケーションがとれているのが何よりです、と伝えました。「ありがとうございました」と答えてくれました。

２．大人たちの温かい見守りと励ましと願い

その１　自殺未遂の経験者から後輩へのメッセージ

◇ＮＨＫの「9 月 1 日は児童・生徒の自殺特異日」という放映を見て、私自身の自殺未遂の体験を正直に語り、「それは愚かなことであった」ことを伝えたいと思います。

私は私立高校 2 年のとき、友人と馴染めず、家庭では暴君的父親への反発もあって、服毒自殺を図りました。異変に気付いた母親の判断で、救急搬送されて胃洗浄を受け、一命をとりとめました。病室に運ばれた私の枕許で、母は「大丈夫よ。何も心配しなくていいよ。ゆっくり休みなさい」と言うのみでした。私は放心状態のなかで、「大丈夫」という言葉を繰り返していました。

その後、両親は離婚して、母と私は小さなアパートに移り、私は私立高から公立高に転校して、朝 3 時に起きて新聞配達のアルバイトをしています。生活は一変し、決して楽ではありませんが、母と子はお互いに将来を見据えて生きています。人が死にたくなるのは、自分がひとりぼっちだと感じたとき、将来が見えなくなったときです。私は大学入試に失敗し浪人中です。けれど、バイト仲間がいます。なにより「大丈夫」という言葉の意味を教えてくれた母がいます。その母は、48 歳にして、介護福祉士の資格を取るべく、通信教育で勉強中です。或る意味、母と私は将来に向けての受験勉強の競争相手です。将来を見据え生きることはすばらしいことです。逆に現在の近視眼的な悩みに惑わされて、死を選ぶことは愚かな限りです。その愚かな体験を持つ私の罪滅ぼしの意味を込めての告白です。

◆これは、その当時に母親から相談のあった事例（平成 27 年 7 月）の続編ともいうべきお話です。ご本人は、これをありのままに、後輩のみなさんに伝えてくださいということでした。

その２　公的相談機関のスタッフからの問い合わせに答えて

◇ＮＨＫが放映した「9 月 1 日が児童・生徒の自殺が多い特異日になっている」という警鐘には、身が引き締まる思いがしています。当県（千葉県）でも、この実態を否定することができません。自殺既遂の場合、親と教師の闘ぎ合いはすさましいばかりです。更には、学校側が自殺の原因が、「いじめによるもの」と認めて、陳謝しようものなら、それに対しての攻撃は後を絶ちません。民間のと言えば失礼ですが、実際に相談に当たっている立場からの理論と実際を聞かせてください、との真摯な申し入れがありました。

◆当会は、その名が示すように、「市民による市民のための」成年後見の実践のための法人です。根本理念として、少子高齢化社会にあって、ひとり成年後見活動にとどまらず、広く社会的弱者に目を向けて活動しています。〈こころの電話相談室〉もそのひとつです。

自殺問題について、今のところ既遂後の闘ぎ合いはありません。青少年の希死念慮については、親や教師から、真正面から見つめた真摯な相談に出合います。「理論と実際」と言うことになると、アメリカの精神科医メニンガーの学説を全面的に信じて、基本的な理念としています。つまり、自殺行為には、①殺したい②殺されたい③死にたい、と言う 3 つの願望が潜んでいる。青年期には①が強く、敵意や憎しみを抱くが、その相手は、親や兄弟、教師などの身近な人たちで、愛と憎しみに揺られ、敵意を抱くことに罪の意識を持つことになり、殺したい願望が殺されたい願望に急転化します。そのため、自殺行為には、他者へのアピールが含まれていると考えています。そのため、精神疾患がない限り、青年の自殺したい心理状態は時がたてば落ち着きます。魂の叫びを受け止めてくれる相談相手が必要だと信じています、と伝えました。

「なるほどね。犯人捜ししている場合ではないですね」と応じて頂きました。

当会が自殺問題に言及して記したのは、本誌の創刊号（平成 26 年 4 月号）でした。日本の自殺は 1998 年に年間 3 万人を超え、以来 13 年の長きにわたって続きました。この重い現実を受け、「自殺は、社会全体で防ぎましょう」をスローガンに、各自治体に自殺対策協議会が設けられて、自助、共助、公助が相俟った援助が確実に進められて、草の根的市民活動をゲートキーパーと呼び、「あなたと大切なひとの命を守るために」を合言葉に黙々と活動していました。その結果、2012 年に 13 年ぶりに自殺者は 3 万人を割りました。本誌でも、「あなたも私もゲートキーパーです」との副題をつけて呼びかけてきました。それは、現在も私共の望むところであり、共有しているところです。

ところで厚労省が毎年出している人口動態調査によると、自殺者数は確実に減少しているものの、10 歳から 19 歳までの若年層の自殺者は増加しています。それのみか人口 10 万人に対する自殺率は、10 歳から 14 歳では 0.8～1．0%、15 歳から 19 歳では 0.6～0．8%になっています。更には、自殺による死因は、10 歳から 14 歳では第 4 位、15 歳から 19 歳では第 2 位になっています。この数値をどう考えればよいのでしょうか？

成長発達の途上の、十分に自己を確立できていない子どもが自殺を遂げることほど、親をはじめ、周囲の大人たち、あるいは子どもたちにとっても、ショッキングな出来事はありません。ところが、小学校高学年、中学生、高校生を対象に、「死にたいと思うことがあるか」と尋ねた、或る民間の調査では、およそ 3 人に 1 人が「少しある」、あるいは「よくある」と答えています。
10 代の子どもにとって、自殺願望はもはや他人事ではないのでしょう。 そもそも自殺とは、耐え難い不快や苦痛から逃れようとする行為です。失意・悲しみ・絶望・怒りなど、その辛さから逃れようとするのは、自然なことでしょう。つまり自殺は、どんなことを、どんなに苦しんでいたかを、周りの人に訴え告げようとする試みであると考えられています。特に子どもの場合は、大人の救い、助け、あるいは理解を求める訴え、叫びであると言えます。

死について、特に自殺について話し合うことは、誰にとっても気の重いことで、できることなら避けて通りたいところだと思います。けれども、成熟した大人として、いきなり本題に入るのでなく、身近な子どもの様子がいつもと違うと感じたとき、「なんだか辛そうね。しんどそうね」などとさりげなく声をかけることで、子どもにとっては、「私はあなたのことを心配しています」というメッセージになります。子どもと心の問題について話す機会となる可能性を含んでいます。

もう一度思い起してください。「私もあなたもゲートキーパーです」。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前 9 時～午後 9 時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈家族の温もり〉 ◆8 月からいじめ、ひきこもり、自殺問題と重苦しいテーマが続きました。多くの反響を集約すると、**家族こそが最良のゲートキーパー**という当たり前の結論に帰着します。◆通常、死ぬほど辛い環境にあれば、自殺する前に家族に何らかのサインを送ります。その時、家族はどうするか？叱咤、激励、軽蔑、無視、傍観、無関心、離脱（追い詰めない）…。◆日本の若い世代の自殺は先進国中でもとりわけ深刻で、動機もさまざまです。若年層の自殺の深層を究明し、長期的な抜本策を望みます。◆過般の電通の東大卒エリート女子社員の自殺事件では、母親が猛烈会社の体質を糾弾しました。自立した社会人なら、家族にも相談し、転属や転職の道を自分の責任で選択できたでしょうに…。何もかも学校の、会社の、社会の、国の責任にするマスコミ好みの風潮からは、お決まりの謝罪会見しか生まれません（ｈ）。(独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業)

新しいふれあい社会　　認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会
情報誌（毎月 2500 部発行）
事務局　我孫子市湖北台 6-5-20
平成 29 年 12 月発行（第 45 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

学校はワンダーランド

榧場　雅子
（臨床心理士・精神保健福祉士）

12 月の声を聞くと、何となく余裕のない気分になり、1 年を振り返ってみるようになります。

思えば、春爛漫の 4 月から 4 カ月、「1 年生になったら…」と題して、小学生から高校生までの新 1 年生の晴れがましさと、その裏に秘められている不安を考えてきました。これらに刺激されたお母さん方から、「青少年の問題と、その対応について記してください」との要望がありました。それに応えるべく、8 月号は 8 ページにおよぶ特集号を組みました。ところがそれは、池に投じた一石の波紋のように広がって、3 か月にわたって、いじめ、ひきこもり、自殺問題にまでおよぶ、重いテーマに至ってしまいました。この暗いテーマを背負ったまま 1 年を終わりたくありません。

実は、学校はワンダーランドです。それに気づくには、学校生活の“面白いこと”“自分だけのお気に入り”を思い浮かべることです。単に「学校に行く」と考えているのではなく、ことさらに、うれしかったこと、感じたことを、しっかり心に受け留めておくことです。

いきなり私事で恐縮ですが、私は短歌が大好きで、毎日曜には NHK 短歌を欠かさず見ています。月刊の NHK 短歌も愛読しています。週ごとの 4 人の各選者による入選歌、添削教室は当然のこと、ジュニア短歌 GO!GO！と題する、小学生・中学生を対象とする短歌教室にも関心を寄せています。「学校はワンダーランド」と気付かせてくれたのは、このコーナーに寄せられた作品の数々でした。作品を読み解きながら、その証を解き明かしていきましょう。

〈小学生の部〉

○ 「山」という かんじならった あせかいて おおきくおおきく ノートにかいた　宇田川実生

「山」は 1 年生で初めて習う漢字です。新しい言葉を覚えるときのドキドキ感が伝わってきます。「あせかいて」と本当に山登りするように、力いっぱい練習していり様子が素直に伝わってきます。学ぶことで知ったよろこびは、きっと学校好きになってくれるでしょう。

○ たて笛で 間違うたびに 舌を出す 君と並んだ 居残り練習　小 4　林 健介

とかく嫌われがちな居残り勉強ですが、この作品の作者も含め、ふたりの子どもは共におおらかで、おかしさすらあります。表立って登場していない先生も、きっとおおらかだろうと思いました。そこには知育偏重的なあせりはないからです。ふたりは他意なく仲良しになれたでしょう。

○ あんなにも 頑張ったのに 逆あがり 鉄棒の下 窪ませただけ　小 4　アン

まるで私の昔の状態を代弁してくれたような作品です。私は小学校の頃から運動能力が著しく遅れていて、今日なら発達障害、学習障害を疑われるほどでした。鉄棒の逆あがりも全くできず、掌にまめができてつぶれるほど練習したのですが、結果はこの作品どおりでした。そのとき、先生は「よーし、がんばり賞」と言って、お尻の土を払ってくれました。クラスメートも拍手してくれました。鉄棒が出来なかった切なさより、先生とクラスメートの温かい対応が忘れられません。アンさんも同じ思いをされたのではないでしょうか。そう願ってやみません。

〈中学生の部〉

○　置きなれた 駐輪場の スペースに 新入生の 銀の自転車　　安　彩花

中学２年生の作。去年まで私の置き場所だったところに、新入生の真新しい自転車が置いてあり、「何となく寂しい」と訴えながら、「上級生になったのだ」という自覚もやんわりと伝わってきて、新学期の空気が生き生きと捉えられています。

○　数学の 小テストでの 爽快な まるつけの音 消えた五問目　　大和谷五輝

これも中学２年生の作品。誰しもが経験したことのある小テスト。先生の説明する正解を聞いて、自分で丸をつけていきます。始めの簡単な問題のうちは、みんなが丸をつける音が勢いよく快よく聞こえていたのに、難しい問題に差しかかった途端に、その音がピタリと止まってしまいました。「大和谷さんの耳の冴えに感心しました。この場面を歌にしたのは初めてかもしれませんね」と、選者は評していましたが、そればかりではなく、ある意味でクラスメートが共有する、切なさが、この一首を支えているように思えてなりません。それは彼の「心」でもあるからです。彼が大人になったとき、「学校」と言えば、この日のことを思い出すでしょう。

○　六限目 あと十分で バスケット 体育館まで おこられにいく　　的場謙吉

少々疲れ気味の六限目の授業、それもあと 10 分になって、ぼんやりと部活動のことを考えている。決して褒められたことではありませんが、捨てることのできない一首です。NHK 短歌全国大会で、入賞しています。作者は部活動に頑張っているのでしょう。叱られながらの厳しい練習。辛いこと、納得できないことも多いでしょう。でも頑張っています。部活動も学校生活の一部ですね。

〈高校生の部〉

○　憧れの 高等学校 「入学を 許可します」との 声響きけり　　群馬県　小池美紀

○　真新しい 制服だけが 知っていた 入学式の 深呼吸五回　　東京日野市　花　凛

どちらも「入学式」の題詠に対しての応募作品です。二首を並べて読むと、新入生の喜びと不安が交々に、そこはかとなく伝わってきます。

○　祝辞聞く 入学式の兵馬俑 後ろを見ればあの子笑いぬ　　愛知県　井深晴久

思わず苦笑してしまった一首。兵馬俑は始皇帝の墓近くに埋葬された陶の兵と軍馬です。何体もが無表情で、同じ顔をして立っています。その姿を入学式で祝辞を聞く新入生の上に重ねています。そんななかで、ふと振り返ったとき、「あの子」は笑ってくれたのです。省略と飛躍の効いた非凡な詠みぶりからは、知性と情緒が伝わってきます。十五の春のときめきでしょうか。

○　僕たちの ここがスタート　校庭に白き石灰 まっすぐに引く　　東京日野市　花　凛

入学式の日、新しい制服に託して、緊張のほどを詠じた同じ作者です。明日は運動会でもあるのでしょうか。生徒たちはその準備をしているのでしょう。上の句で「僕たちのここがスタート」と、大らかに詠じて、下の句で「校庭に白き石灰まっすぐに引く」と具体的に詠み、一首全体が将来を見通した比喩になっています。“僕”ではなく “僕たち”がいいですね。その力量に脱帽です。

○　最終回 打席に入った君のため トランペットで贈る 「頑張れ」　　埼玉県　九条はじめ

勝ちいくさではないようです。しかし雄々しく堂々と、最終回打席に入った選手（友人）のために、精いっぱいの願いを込めてトランペットを吹く作者、甲子園での華やかな応援合戦はないけれど、心の内は決して負けていません。試合の結果の程は知るよしもありませんが、この日の熱い思いは互いに卒業後も忘れることなく、「高校時代の賜物」として語り合う日がくるでしょう。

この日の詠草についての続詠又は友人からの返歌があるといいな、と思ってしまいました。

〈先生の部〉

学校のことを語るのに、児童・生徒の話だけではいささか片手落ちです。先生が重要な役割です。

○　たから箱を 開けるがごとき 始業式　一年一組三十五人　　岐阜県　堀田桂子

本年３月に本誌で紹介した一首です。ひとり娘の小学校入学を前にした母親の不安相談に当たってこの歌を紹介し、「こんな優しい先生が待っていてくれるといいですね」と伝えてあったところ、奇しくも娘さんは一年一組で、クラスメートは三十五人でした。感動したお母さんは、聞き覚えた堀田さんの歌を披露しました。それを聞いた先生も大喜びで、「私の思いそのままです」と挨拶し、クラスはたちまち一つになりました（読んで頂いた方もおられると思います）。

○　今日子らは われに寄り来ず 三本の チョークの折れし 授業であれば　　秋田　橋本英行

チョークが３本も折れたのは、先生である作者の、不穏な心の反映だったのでしょうか。そんな、微妙な空気を、子どもたちは敏感に読みとっています。先生は、それを素直に受け反省しています。先生と生徒、日頃のこんなやりとりが重なって、やがて深い信頼関係が生まれるのでしょう。

○　ひまわりが　覗こうとする　通知表　胸に隠して　少女は駆ける　　京都市　麻倉　遥

終業式のほほえましい光景。作者は小学４年生を担任する先生。通知表の中身は承知しています。けれどもその反応が心配。他方、生徒の方は中身が心配。そこで親より先に密かに中身が知りたい。「ひまわりが覗こうとする」に工夫があり、明るさがあります。「胸に隠して」への展開が生きて、全体にはずむ調子になっています。密かに覗いているのは、本当は先生ですよね。

○　満足と 迷い入り混じる 通知表 むかし受ける身 今は渡す身　　千葉県　いさむ

通知表には、生徒ひとりひとりの悲喜こもごも、明暗の物語が秘められている。それを思えばこそ、子どものころを振り返っての若い先生の苦しい胸のうちがにじみ出て、共感できます。先生といえ、人が人を評することの難しさは、子どもが大きくなれば更なるものがあります。

○　答案に　にじむ青春　それぞれに　良し悪しなくて　可と不可はあり　　中津川勤坐

青春というからには中学生以上の生徒でしょうか。答案の採点をしながら、生徒ひとりひとりの「個性」を見守っています。そこには、生徒それぞれへの期待も込められています。その一方では、「採点に無用な情けは禁物」という大原則を守らなければなりません。教師ならではの苦しみが、読み手の心を強く揺さぶりました。教育とは、教え育てることだと、しみじみ思い返しました。

○ 事故死せし 子の家を 三十年ぶりに訪ひ わが教職のこと 了へむとす　　柏崎驍二『四十省日記』

これは投稿歌ではなく、名ある歌人の歌集の中の一首です。教員生活を終えた作者が、遣り残した最後の仕事として、事故死した教え子の家を訪うという事実を淡々と読みながら、「三十年ぶり」という時間に、作者の教育者としての真摯さが痛く感じられます。かつて担任した生徒の事故死を心に深く鎮めながら、敢えて訪ねようとしなかったことを、教員生活の最後の最後にしてあって、それを以って、「教職のこと了へむとす」と、詠い上げています。作者の誠実さと信念、生徒への深い思いでしょうか。「教職者の誠実さと苦衷」でしょうか。

○　上着を脱ぐ 大きな字を書く 百の顔に 見つつ見られる 四〇一教室　　佐々木幸綱

これは知る人ぞ知る佐々木幸綱先生の早稲田大学を退職近く、大学での残り少ない生活への感慨を詠じた第十五歌集、『ムーンウオーク』に収められた中の一首です。その詠いぶりは肩肘張らず、「上着を脱ぐ」「大きな字を書く」「見つつ見られる」と、身体の動きによって表現されています。大学教授生活にやがて終わりを告げねばならない寂しさを、懸命に振り払おうとしているようで、巧まずして、心のうちが伝わってきます。下の句、「百の顔に見つつ見られる」から教授と学生の間の心理的交わりが、伝わってきて胸を打ちます。

小学校１年生から大学教授までの詠草を「学校大好き、ワンダーランド」の証になるように選び出しましたが、どこか物足りません。それは今現在、学校とは特に関与のない多くの人たちの詠んだ作品がなかったからだと気づきました。学校は誰しもの心の奥深く、「忘れ得ぬ場」として内在しています。それが或る日或るときの思いとして、魅力ある内容の一首に表現されています。

- ○ **ごつごつと していた桜の 木の根っこ 今はどの子の 特等席に**　竜ヶ崎市　佐倉まり子
- ○ **学校の 隅でたたずむ 女の子 あの子はきっと 昔のわたし**　川西市　原田洋子
- ○ **校庭の おおきな桜の 木の下に 埋まるワタシを ミツケテクレル?**　世田谷区キャサリン錠前
- ○ **校庭に 卒業記念の 碑を探す あの日の自分を 取り戻すため**　宇部市　あや
- ○ **どこよりも 友と過ごした 校庭を 裸足で走り 大人になった**　品川区　伊庭哲樹
- ○ **校庭を 走ってこいと 宿題を 忘れたときの 古風な罰則**　東京　平岡淳子
- ○ **砂ぼこり 砂漠のような 校庭が オアシスだった あれは十代**　横浜　若山かん菜
- ○ **絵葉書の ように優しい 空でした 過ぎて気付いた 校庭は青**　明石市　西端康孝
- ○ **廃校を 訪ねてみれば 桜木が 在校生のように迎える**　東京　平岡淳子
- ○ **廃校の 校庭に立ち ひとり知る 土や柱の 静かな匂い**　岡崎市　湯朝俊明

これらの 10 首は、毎日曜日の NHK 短歌教室で名ある選者の選に入って、テレビで放映された詠草ではありません。NHK 短歌テキストに、一人一首一行の地味な形ながら、「佳作」として紹介された作品です。テキスト 10 冊の中から、学校に関する作品を選んで、特に胸打った詠草に、幾枚もの付箋をつけては剥がす作業を繰り返しながら、漸く選び抜きました。それらの詠草を、並び順にも工夫して読み返してみると、或る意味では連歌問答ともなって、胸に迫ってきます。改めて人びとの学校への思いは、日常生活の中でも忘れられることなく生きていて、ある日ふと目覚めて、感動を呼び起こし、自ずから三十一文字として表現されたと、思いを深くしました。

そんな思いを胸に、地元の小学校を訪ねてみました。校庭には子どもたちの歓声が満ち溢れて、校章ともなっている八重桜は、葉を落としていましたが、枝にはひっそりと冬芽がついていました。

そのとき、改めて本稿で選んだ詠草 10 首すべてが、校庭、桜を詠んでいると思い返しました。それは子どもの頃の思い出が、学校、校庭、桜とひと括りとなって心に仕舞われていたものが、温かく懐かしく蘇り、三十一文字に表現されたのだと思いました。

それ故にこそ、学校はワンダーランドであると確信することができました。そこで返歌を二首。

- ○ **校章の 深きえにしぞ 八重桜 子らの行く手を 永久に守らせ**　雅女
- ○ **健やかな 心保てよ 校庭の 桜は汝を 見守りてゐむ**　雅女

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　毎週木曜日　午前 9 時～午後 9 時

相談担当　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　個人情報は厳正に取り扱います。

〈読者に学ぶ〉◆これらの作品からは筆者の教育に対する思い、学校や教師への信頼と期待が伝わってきます。教えることは学ぶこと。子供たちから教えられることも多いはずです。まさに教学相長也です。◆筆者の眼差しは優しく、冷静で、的確です。とりわけ日本の未来を担う若者たちへの温もりと愛情を感じます。親も兄弟も夫も教育者という生活環境にあって、自らも児童や障害者問題に永年携わってきた専門家としての自負と矜持があるのでしょう。◆本誌の創刊から足掛け 4 年、相談室も 3 年になります。毎月 10 件を超える反響を前に、驚きと緊張と喜びの連続でした。多くのことを学びました。助成事業の終了を機に、来年 3 月末でひとまず区切りをつけますが、相談室はしばらく続ける予定です（h）。　（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

新しいふれあい社会　　認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局　我孫子市湖北台 6-5-20

平成 30 年 1 月発行（第 46 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

座間事件の深層（その１）　被害者の心理と悪魔の誘い

榧場　雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

神奈川県座間市のアパートの一室で、15 歳～26 歳の 9 人（男 1 人、女 8 人）の遺体が発見され、元風俗スカウトマンの白石隆浩が死体遺棄容疑で逮捕されたのは、昨年 10 月 31 日のことでした。テレビも新聞も連日その続報を報じ、実は前代未聞の猟奇的殺人事件であることが判明しました。犯罪事件には全く素人の私共の相談室にも、市民の声として、意見を求める声が相次ぎました。

最初の相談は事件から 9 日目、高校 2 年生の娘を持つ母親から、我が子と被害者の身を重ねて、一番若い子は、高校 1 年生と言うではありませんか。有名女子大学の学生もいるとのことですね。うちの娘は年齢的には、真ん中の高校 2 年です。来春には受験というのに、何の屈託もないように、毎日を過ごしています。こんな娘の心の奥底には、自殺を考えるときがあるのかと思ったときに、冷水を浴びせられた思いがしました。折も折、手に入れたのが「新しいふれあい社会」11 月号で、図らずも“青少年の自殺を考える”特集号でした。それは事件が発生する前に、編集されたことは容易に考えられました。そこには、「子どもは自分が愛されている」と思えば、自殺しません、とはっきり言いきっているのを読んで、救われた思いがしました、と述べ、そのうえで執筆者と生の声で話したくて電話をしました、と言うことでした。

これを受けて、相談員の立場から始めてこの事件に触れ、容疑者は、なぜ人に知られないままに、これほど多くの若者を惹きつけたのか、逆に言えば被害者は、なぜ安易に容疑者のところへ行ってしまったのか、そこにある青年期特有の心理状態を見逃すことはできません。この期には、「自分の生き方を見い出す」という課題が与えられています。課題達成を試みるなかで、挫折にも出会い、成長します。そのなかで、「生」と「死」について考えるのも当然のことです。人の心の中には、生きたいという願望（エロス）と死んでしまいたいという願望（タナトス）の両方があります。生活が生き生きとしていて、生きるための目標があるときは、タナトスは心の奥底に、ひっそりとしていて意識されることはありません。ところが青年期は、怒りや悲しみ、ストレスや苦痛などの負の感情が敏感になっていると、脳科学的に立証されています。そのため苦痛や孤独を感じやすく、タナトスを呼び起こしやすくなっているのが特徴ともなっています。

しかし「死にたい」という思いがよぎることは、そのまま「死」に真向かうことではありません。「死にたいよ」とのつぶやきは、「死にたくなるほど辛いよ」と言い換えて対応してください、と記したのも、このことを考えてのことでした。そこには、「誰かに自分の気持ちを聞いて欲しい」「誰かに自分の辛さをわかって欲しい」と言う痛切な思いが隠されているのではないでしょうか。その心理に巧みにつけ込んだのが、白石隆浩容疑者の悪魔のこころだったのではないでしょうか。ネットの世界が若者にとってリアルになりつつある今日、身近にいる大人として若者の心理状態に思いを致し、このような被害者が二度と出ないことを切に願い、見守りましょう、と伝えました。

（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

ところが、この問題をこれで終わりにすることは、世間が許してくれなかったのです。
警視庁の捜査で、9 人の被害者の身元が明らかになって、11 月 11 日付の全国紙朝刊は各紙一斉に実名、年齢に加えて、エピソードまでを交えて報じていました。それを読んで、犯行の残酷さに、白石容疑者に対する怒りがいやが上にも募るのを禁じ得ませんでした。それと同時に、マスコミが被害者の実名や年齢、エピソードまで報じることへの疑念はぬぐい切れないものがありました。
果せるかな、テレビのインタビューで、被害者の一人とみなされる高校生の家族と親しいという男性は「本当に可愛いがられていた。車が大好きだった」と言い、「乗用車のナンバーも娘の名前に語呂合わせて決めていたほどだった。今はそっとしておいて上げてください」と答えていました。娘とは事情があって離れて住んでいたという父親は、「娘が事件に巻き込まれたとは信じたくない」と素っ気なく答え、その場をそそくさと立ち去ってしまいました。胸を締め付けられる思いでした。巷での無差別のインタビューでも、「被害者のプライバシーはしっかり守ってあげるべきだと思う」「被害者家族の心の痛みを思えば、この上傷口に塩を塗るような行為は慎むべきと思います」など、いかにも尤もらしい意見が多い中で、中年の女性が毅然として「被害者にも家族にも気の毒だが、この事件の被害者は、誘拐や通り魔のように、一方的に受けた被害とは違うと思う。ツイッターで知り合った〈死の案内人〉のところへ、〈悩める自殺願望者〉として自分で出向いている。秘密性の高いＳＮＳの中で、どんなやり取りが交わされたのか、彼女たちはどうしてやすやすと、容疑者の罠にはまってしまったのか、今後のためにも、このことを伝えるのはマスコミの義務ではないか」と言っていました。一瞬、息が止まるほどの感動を覚えました。相談員などと、自負していながら、ここまで毅然といえない自分を反省し、「その際には被害者の名誉、その遺族への心ない風評被害、サポートは忘れないことですね」と独りで付け加えて、自分を納得させました。

それから 5 日後、元高校教師で現在は地域子供ボランティアの世話人をしていると自己紹介するW氏から、事件に対する意見を求める電話がありました。怒りをあからさまにして、強い口調で、この事件は、犯罪史上も稀に見る猟奇事件と言うより、殺人そのものに異常な興奮を覚えるという快楽殺人ではないか。それとも全く新しい人間像なのか、と辛らつな意見を早口に述べ立てた上で、なお、被害者は 10 代の未成年 4 人を含む若者ばかりだった。その身元を、大新聞が一斉に実名で報じていることにも疑問がある。被害者は勿論のこと、家族の心情を思い遣るべきではないか、としんみりと付け加えました。それは私の胸のうちを凝縮したような思いでした。同時に、多くの市中の皆さんも共感するところではないでしょうか。

しかし問題は余りにも重く、私ごときが容易に答えられないとまどいに似たものがありました。そこには、数日前に高校生の我が子と被害者を重ねて話し合った、日頃の母親との心のふれあい、テレビの取材に応じた、一般市民の偽りのない答えの重さが、私の脳裏を離れなかったからです。私は、このことを感想を交え正直に伝え、市中にある身として、このような悲惨な事件の被害者を二度と出さないためにも、ここは被害者のありのままの姿を真正面から受け止めて、どんな人が、どうして不条理にも命を奪われてしまったのか、**その事実を実感として、受け止め共有する**ことが、社会的にも意味があり、辛いことですが大人としての務めではないでしょうか、と伝えました。
「なるほどねえ…、容疑者の異常な人格、狡猾な手口ばかりを考えている場合ではないですね。被害者の実態を知り、事実を実感として受け止め共感するのが、辛いことだが大人としての務めとまで言われると、反論の余地がありません。もう一度調べ直します」と言ってくれました。

2 週間後、W氏から再度の電話がありました。「あれから能う限り事件の情報を収集しました。聞いてください。そして考えてください。先日の言葉をそのままお返しすると、事実を実感として受け止め、共有することが、社会的にも意味があり、大人としての務めだと思います」と、一気に熱意を込めて迫られました。返す言葉もなく、その情報を傾聴しました。

事件発覚の端緒となり、9 人目の最後の被害者・田村愛子さん（23 歳）は、10 月 23 日に「死ぬ決心がついた」との連絡を白石宛に入れたまま、消息を絶っていました。兄の話によると、幼い頃父親の家庭内暴力から逃れて、兄とともに母親に伴なわれて横浜市から山梨県甲州市へ転居して、穏やかな地域で学童期は事なく伸び伸びと過ごしました。中学 1 年のとき八王子市に転居したが、学校でのトラブルをきっかけに（詳細不明）、家に籠もるようになり、23 歳を迎えていました。

この間のことを、兄は「妹は家族以外の人と会うことを極端に怖がっていました。彼女にとって家の中が世界のすべてのようなものだったと思います」とツイッターに投稿しています。6 月に母親が他界し、事件当時、本人は医療法人が運営する市内のグループホームに入居していました。

事件発覚のきっかけは、兄がツイッターで妹の失踪に関する情報提供を呼びかけていたところ、ある女性が、「妹さんと交流していた人物と同じハンドルネームの人がいる」と申し出たのでした。兄からの捜索願を受理した高尾署は、その女性に協力を求めて、女性がツイッターで白石容疑者を神奈川県内の、ある駅におびき出しました。彼は駅までやってきましたが、女性が現れないので、諦めて帰るところを捜査員 2 人が尾行し、現場のアパートを割り出したと言います。

最初の被害者と見做されている会社員のＡ子さんは、厚木市で母と兄の 3 人で暮らしていたが、8 月 21 日に「やり直したい。失踪します」と簡単な書き置きを残して姿を消してしまいました。白石の供述によれば、Ａ子さんを探しにきたバンドマンの西中匠吾さんも、自殺願望の持ち主で、この事件のただ一人の男性被害者になっています。彼を知る高校時代からの友人は、「最後に彼と会ったのは 8 月 24 日で、心なしか元気がなく“退院したばかりで…”と言っていた」と言います。「女に振られて落ち込んでいた」と話すミュージシャン仲間もいました。さらに注目されるのは、白石容疑者はＡ子さんから 50 万円を奪ったと供述していることです。最初に大金を得たことで、仕事で稼ぐより自殺志願者から金を奪うほうが早いとの身勝手な考えが芽生えたのではないか、とみる向きもあるようです。

被害者の中で最年少のＢ子さんは、15 歳の高校 1 年生。彼女の足取りが消えたのは、夏休みも終わりに近い 8 月 28 日の夜のことでした。高校の同級生は、「穏やかで可愛らしいタイプでした。一学期は普通に話していたのですが、夏休み中にＬＩＮＥしたときには返事がなくて…。友だちの噂では、両親の仲が悪くて、よく家出をしていたそうです。だから今回もそうなのかな、などと、話していたのですが…」と遠慮がちに話してくれました。別の中学時代の友達は「ホラーゲームやホラー小説が好きで〈殺戮の天使〉と言うホラーゲームをよくやっていました」と話してくれました。

ジャーナリストの江川紹子氏は、「こんな可愛い子が、いろんな悩みもあったかもしれないが、これから楽しいこともあったろうに…。胸が痛みました。けれどいつどこで誰が何をしたかという要素をしっかり伝えるのが、報道の基本です」と述べています。これこそ、事実を実感を伴って共有することの基本になるものだ、と思いました、とW氏は熱っぽく語りました。

W氏の話はなおも続きました。さいたま市に住む高校 2 年生のＣ子さん（17 歳）は、三次元のイケメン俳優より、深夜アニメのキャラが好きなタイプでした。9 月 30 日の午前中、「お昼を買いに行ってくる」と言って家を出たまま帰ってきませんでした（それ以上の詳細不明）。

もう一人の高校生、福島市に住むＤ子さん（17 歳）は、両親が昨年の 4 月に離婚、母親と二人の生活でした。東京に憧れていて、一昨年の暮れから翌年初にかけ家出していました。今度は 9 月の末頃から行方が分からなくなり、母親から元夫である父親の許に連絡が入っていました。11 月の初旬、ＤＮＡ鑑定の資料提供の依頼に訪れた捜査員に、「娘が事件に巻き込まれたと思いたくない。もしそうだと判ったら僕は犯人を生かしてはおかない」と怒りを露わにしていたと言います。

もう一人の犠牲者、所沢市に住むＥ子さん（19 歳）は、都内の名門女子大学の 2 年生で、理科や化学が得意な「リケジョ」タイプでした。9 月 15 日に突如、誰にも告げず姿を消していました。

被害者の中には、風俗店に勤務していた女性もいました。春日部市に住むＦ子さん（26 歳）は、心の病を抱えていて、夫とは離婚したばかりの身で、埼玉県内の風俗店に勤務したのは 8 月末から 2 週間ほどでした。「笑顔が全くなく、水商売や風俗店などで勤まるとは思えないタイプでした」と店の関係者は明かしています。最後の出勤は 9 月中旬、その後は連絡が取れなくなっていました。

最後になってしまいましたが、横浜市のＧ子さん（25 歳）は、高校を卒業してから約 7 年の間、ひきこもっていました。母親の励ましで（父親不在？）、一念発起して昨年の 4 月からコンビニでアルバイトを始めました。約 10 カ月を経た 10 月 18 日の夕方、アルバイト先を出てから、誰にも告げずに失踪してしまいました。母親によれば、おとなしい性格で人付き合いも苦手、アルバイト先での接客にも悩んでいたようです。自室でＬＩＮＥか何かＳＮＳをやっていたのは知っているのですが…、と言い、翌日捜索願を出しています。

こうしてまとめてみると、「事実を現実のものとして実感する」重さに責められる思いがします。9 人の被害者に共通するのは、自殺願望→失踪→その行く先は、救いの手として信じていた人で、実は殺人モンスターだったというのが、冷厳な事実であり現実です。このことを遡って考えると、青年期の危機・同一性拡散⇔機能不全家族⇔抑うつ状態→希死念慮→自殺願望という道筋が見えてきます。有識者は挙って地域の自殺対策協議会や自殺防止コールセンターの拡充を説いています。国立精神医療センターの医師は、「〈死にたい〉と言える人間関係が大切です。人との繋がりが自殺を防ぎます」とコメントしていました（11 月 11 日毎日朝刊）。ネットに詳しい識者は、「家族にも友人にも言えない本音や願望を聞いてくれるネットの相手は貴重な存在で、ＳＮＳのやりとりは、会って話すと同じぐらいの内面の交流が成立します」とコメントしていました。

いずれも十分に納得できました。けれど…、いえ、だからこそ、声を大にして言いたいのです。「**あなたも私もゲートキーパーです！**」と。そして、「**We are not alone !**」と。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前 9 時～午後 9 時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈社会的孤立の防止〉◆日本中を震撼させた座間事件に対する疑問や反省は少なくない。第 1 に国・県・市の立派な公的相談機関がなぜ利用されなかったのか。第 2 に当相談室には家族から多くの悩みや相談が寄せられるが、本人の悩みを直接聞くことはごく稀である。第 3 にもし相談室が被害者と接していれば、何人かの若者の命を救えたのではないか。◆26 年 1 月に障害者権利条約が批准され、成年後見制度の抜本的な改善と利用の促進が求められている。「親亡きあと」の障害者や 2025 年に 720 万人に達する認知症高齢者の「後見爆発」にどう対応するのか、いったい誰がその権利を擁護し生活を支えるのか。「市民が市民を支える社会」を実現するしかない (h)。

新しいふれあい社会　　認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局　我孫子市湖北台 6-5-20

平成 30 年 2 月発行（第 47 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

座間事件の深層（その 2）　殺人鬼と化した加害者の謎

榧場　雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

人びとに戦慄をもたらした、9 死体遺棄事件の発覚から３ヶ月を経ました。人の噂もなんとやら、街角でも人の話題になることも少なくなりました。けれど、捜査関係者の地道な努力は続いていて、9 人の被害者それぞれのＤＮＡの鑑定などで、本人と確認された時点で、容疑を「死体遺棄」から「殺人」に切り替え、再逮捕します。その度にマスコミの報道もありますが、意外なことに人びとの反応は、「今さら言わなくても、本人がすべて自白しているものね。死刑に決まっているよね」と冷ややかに、「結果（判決）ありき」の反応が大半を占めています。それでよいのでしょうか？

当相談室では１月号で、このような事件が二度と起こらないことを願って、被害者個々の情報にもふれて考えました。それは、「事実を実感として受けとめ、共有する」ためにも、必要なことと考えてのことでした。被害者の実名報道についての、マスコミによる街角でのインタビューでは、「被害者のプライバシーを守るべきで、誰が被害者であっても、犯人に対しての怒りは変わらない」「被害者の実名や顔写真まで出さなくても、加害者が犯した罪の重さに変わりがないのではないか」などと、犯人（容疑者）への憎しみ、被害者に同情した意見が大半を占めていました。

当相談室に寄せられた意見にも、元刑務官という女性から 9 死体の遺棄、いわゆる座間事件は、報道が進んで全容が明らかにされるほど、その残酷さに腹が立つ。残酷さという点だけで言えば、昨年、相模原で起きた、障害者入所施設での、利用者殺傷事件を上回ると言ってもよいと思う。無差別大量殺人事件の点から見れば、平成 13 年の池田小事件、平成 20 年の秋葉原事件を思い出す。どちらも歪んでいるとはいえ、彼らなりの社会への反逆心があって、死刑を覚悟した上で、犯行に及んでいる。犯行に至る前に心の歪みを癒してあげる術はなかったのか、聞いてあげる人は一人もいなかったのか、と思うところがあった。しかし、白石容疑者の場合には、それらが全くない。強いて言えば、昭和 43 年に起きた大久保清事件が思い出される。当時は珍しかった高級乗用車を乗り回し、街中で目をつけた若い女性に窓越しに声をかけ誘い込み、2 カ月に 8 人を殺害した稀代の猟奇事件と騒がれたが、最終的に「快楽殺人」「屍姦」と判断されて、死刑が執行されている。白石は、これと類似した、或は同型の犯罪ではないか。それとも、全く新しいタイプの犯罪か、と自身の犯罪についての知識と事件についての見解を述べて、意見を求められました。

私としては、いいえ、「市民が市民を支える社会」をめざす後見人の会の相談員としては、今は容疑者の罪名を考えることより、このような事件が二度と起きないためにも、起こさないためにも、「何が彼をこのような殺人鬼にさせたのか」「事実を実感として受け止めて共感する」ためにも、「被害者に行ったように、彼の成育歴、家族歴、学校関係、友人関係、社会歴を能うかぎりに探って、考えたい」と伝えるのが精一杯でした。「そうですよね。犯人を憎んだり、怒っているばかりでは始まりませんね」と応じてくれました。

白石隆浩は座間市で出生、家族は両親と妹の 4 人の平均的な核家族。父親は日産リーラなどの、電気自動車の充電に使われるコネクタの設計士で、経済的に問題はなかったと考えられています。住居は、今回の事件の現場となったアパートからおよそ 2 キロほど離れた、住宅街の一角にある一戸建ですが、近隣との交流には乏しく、「夫婦は別居中らしい」程度の情報しかありません。

小学校の友人によると、日頃はおとなしくて、どちらかと言うと、“いじられギャラ”でした。その一方で、彼の家でマリオカードやツイッターで遊んだときに、いつもは感情的になることなどないのに、ゲームで自分が負けると半狂乱になって驚いたことを今でも覚えています、と証言しています（週刊文春　社会部記者）。

中学時代は、特にいじめということではないが、体育部の同級生からヘッドロックを掛けられているのを、しばしば見かけたことがあります。いわば、“いびられタイプ”とでもいうのでしょう。高校進学に際しても、誰とも話したことがなく、県立高校で国際経済科という女生徒の多い学校に進み、座間からは彼ひとりだけだったので、「座間石」と、渾名をつけられていたという噂だけは聞いたことがあります。その後の交流は全くありません（中学時代の友人の話　同上）。

高校時代は、彼はクラブにも入らずに、市内のホームセンターでアルバイトをしていました。周囲に溶け込めず、“おたっくぽい”印象しかありません。正直にいって、野球部やサッカー部の屈強な連中から、肩を殴られたり、プロレス技をかけられたりしているのを見たことがありました。忘れられないのは、高 2 の二学期に、連絡もなく、1〜2 週間登校しなかったことがありました。久々に登校したとき、担任から理由を聞かれ、「自殺しようと思ったができませんでした」と答え、教室中がざわついたことがあります。そのとき、先生は何も言わずに過ぎてしまいました。その後、彼はますます孤立していったように思います（高校時代の同級生の証言　同）。

更に気に懸かるのは、同じ時期に両親が別居するようになり、妹は名門女子大付属高校を目指し母方に移りました。彼は父方に残って通学を続けていましたが、父と子は別々に近くのコンビニへ弁当を買いにきていた、との情報もあります。

高校卒業後、大手スーパーに入社しました。配属先の希望を聞かれ、即座に「パン屋がいい」と答えたと言います。当時のパン屋は女性ばかりだったので、女性に囲まれた職場に憧れていたのでしょう、と当時の職場関係者は推測しています。2 年でそこを退社。パチンコ屋や携帯ショップなどを転々とした後、平成 27 年に始めて夜の世界に足を踏み入れました。

スカウトマンに転じた彼については、その当時付き合いがあった、同僚のスカウトマンＹ氏が、事件発覚直後に、テレビの取材に応じています。彼は日頃から金を稼ぎたい。月に 100 万円位は稼ぎたいと言っていました。そのために、池袋のスカウト会社で働くようになりました。しかし、実力が伴わないため、精神的に病んだ女性ばかりをスカウトするので、「使いものにならない」と言われていました。話術の修行のためにもマルチ商法の知人を紹介したら、自分が金を払って入会してしまったのには呆れてしまいました。

更に彼は酒に弱いのに、酒に溺れて酔っぱらい警察の厄介（留置）になったこともあります。同じ頃、仲間たちと心理テストをしたことがあります。そのとき彼に、“サイコパス”との結果がでました。何か前兆のように思えてなりません、と情感を込めて語っていました（匿名、顔全体を網掛けにする約束で収録された）。

このような、自堕落な生活をしていたというものの、犯罪史上でも類のないような、おぞましい殺人鬼に変身してしまったのか、スカウトマンとはいえ、触法行為となるような女性への接し方を垣間みせる、彼の人格の二面性にも触れて、探ってみました。

前述のＹ氏の話からも察せられるように、彼は金銭に対する執着が強く、スカウトマンの反面で、ＡＶにも出演しており、「人気女優の〇〇と、屋上にプールのあるスタジオで撮った」と自慢気に話をしていたなどと、彼を知るという遊び仲間（匿名）の情報もあります。スカウトマン、ＤＶ男優と、裏稼業にかかわるうちに、私生活は荒んでいく一方だったと思われます。

平成 28 年の春、スカウトで出合った女性から「レイプされた」と言われ、本人は「合意だ」と主張していたが、相手から「警察に行く」とまで言われていました。同年 6 月以降、ツイッターで「フェアリー」や「♪全国在籍出稼ぎ♪」などの複数のアカウントを開設して、出会い系アプリを利用、そこで女性を風俗に勧誘していたが、トラブルが相次いでいました。特に顰蹙を買ったのは、ツイッターで知り合った女性Ｊ子さんに対する悪質な仕打ちでした。Ｊ子さんは必要に迫られて、3 万円を借りたところ、「身分証の原本などを全部預かる」と、住基カード、キャッシュカード、保険証まで持ってこさせ、茨城県の違法風俗店に紹介した上、風俗店用のヌードを撮影されました。身分証が返ってきたのは返金後 4 カ月経てからのことでした。同じ年の夏の深夜、新宿歌舞伎町でスカウトされた女性は「ガールズバーで働きたい」と言うと、「俺、ＤＣ（違法風俗店）に強い」と言って、水戸、土浦、群馬などの出稼ぎができる風俗店をごり押ししてきました、と明かしてくれました。

この頃になると、彼は「悪徳スカウト」と呼ばれるようになり、肩書は「スカウト会社副代表」でしたが、代表が常に海外に出かけ、仕事を押し付けられている、と焦燥感を露わにしていました。特に仕事を紹介した女性が飛ぶ（音信不通になる）と抑うつ状態になり、平成 29 年 1 月になると、「人生ログアウトしたい」などと漏らすようになりました。

疲弊する彼に追い打ちをかけるように、2 月になり茨城県神栖市の違法風俗店に女性を紹介したとして、茨城県警に、職業安定法違反容疑で逮捕されてしまいました。ここまでくると、さすがにショックを受け、スカウト業から足を洗い自宅近くの食品店で週 4 日のアルバイトを始めました。しかし、規則正しい生活は 2 カ月もたず、一度溺れた無軌道な世界に舞い戻ってしまいました。7 月下旬には川崎駅近くの商業施設で、女性をナンパする姿が目撃されています。

事件現場となったアパートを契約したのは 8 月 22 日のことで、その日の夜「死にたい」と言うツイッターアカウントを開設。9 月 15 日には、「首吊り士」と言うアカウントを開設して積極的に、“自殺の案内人”として“悩める自殺志願者”を指南するようになりました。

ところが、それより前の 8 月中旬からノコギリ、鉈、キリ、ロープなどの殺害のための道具を次々と購入していることが捜査で明らかになっています。同時にスマホで「練炭」「溺死」「首吊り」などのキーワードを頻回にネットで検索したことも捜査結果として報道されています。

最後の被害者・田村愛子さんの捜査に向かった警察官が、「田村愛子さんを知っているか」と、尋ねると、玄関にあるクーラーボックスを指差して、平然と「彼女ならここにいます」と答えたと言います。そこで捜査員が目にしたのはクーラーボックスに収納された 9 つの頭部でした。
一捜査員は、警察官の身でありながら、怒りと怖ろしさで身の震えが止まらなかったと言います。

この一連の記述に当たって、事件報道直後から、「事故を現実のものとして、実感する」ために、「何が彼をそうさせたかを探る」ために、折あるごとに図書館や地域の近隣センターに足を運び、

数種の新聞、週刊誌にも目を通して、必要な個所を抜き書きしました。また或る時はインタビューよろしく、市中の人に、こちらから声をかけ、意見を聞くこともありました。この間にもテレビの報道は逃さず視聴していました。相談室にも、真剣な意見が寄せられていました。

これらのことを踏まえ、新聞や雑誌の抜き書き、テレビのニュースなどで得た情報を縦軸として、街中で直接聞いた意見、相談室に寄せて頂いた意見を横軸にして織りなしたレポートです。

こんな事件さえなかったら、おそらく誰からも忘れられていたとさえ思われる、小学校時代から高校時代までの 12 年間、彼の心の奥深くに抑え込まれていたであろうストレスを示すものとして、当時の級友が、それぞれに当時の状態を如実に物語る短い言葉を思い出してくれました。

小学校時代“いじられキャラ”、中学校時代“いびられタイプ”、高校時代“おたくっぽい印象”といわれていたという事実をどう考えますか?

忘れてならないのは、この時期に本人の口で語られている、「自殺念慮、未遂」の一件です。教室中がざわついたというのに、先生は何も言わずに、その後のフォローも定かではありません。加えて、この件についての家族からの連絡や相談があったのか否かすら、明らかにされていません。更に、同じ時期に両親は別居し、優秀と見做されていた妹は母親と共に家を出て、本人は父親のもとに残り、父子家庭となっています。このことについても、その当時は多くは語られていません。これが小学校入学以来、高校卒業までの、対人関係、家族状況の「事実と実感」です。

高校卒業後、就労したものの青年後期の「自分の生き方を見い出す」課題が達成できないままに、無責任、不安、孤独、性役割の葛藤の 4 つを兼ね揃えた、ピーターマンの心模様がうかがえます。その後はスカウトマンに転じていますが、心の中は冷たい風が吹き荒れていたのだと思われます。逮捕される直前まで、彼の手に握られていたスマートフォンには、ぐったりとした遺体に手をかけ、解体していく一部始終を収めた画像が保存されていたと、報道されています。週刊誌などは、9 人を次々に殺害した犯行動機は、殺害そのものに異常な興奮を覚える「快楽殺人だった」などと書き立てています。有識者は「この犯人は全く新しいタイプの殺人者ではないか、単に猟奇事件としてではなく、社会学や文明学の観点から解明を要するのではないか」と説いています。

とまれ、彼の生育歴を見ると、改めて生育環境の心の問題を思わずにはいられません。それは、家庭、学校に止まることなく、地域社会全般を含めてのことです。いつ、この事件を真似た犯罪が起きないとも限りません。それを防止する一助に私共があります。もう一度言わせてください。「**あなたも私もゲートキーパーです！**」と。そして、「We are not alone !」と。

〈世に出る前の準備〉◆漫画本『君たちはどう生きるか』がバカ売れしているそうです。自分の生き方に悩み、不安を覚える若者が多いからでしょうか。座間事件の加害者も小中高校時代に良き師、良き友、良き家庭に恵まれず、自分の生き方を見つけられないまま、サイコパス人間と化したのでしょう。◆キリスト教におけるような神の抑止力がなければ自律ができず、自立も困難。真の個人主義者たりえず、利己主義者となるのみである。それゆえ、家庭・社会・国家の中で生きる普遍的な規範を教えること＝他律が必要である、と力説する識者もいます。◆教育の三本柱は知育・徳育・体育。知育も体育も基本・基礎となる型・公式・原理を学ぶことから始まり、その先に応用や個性が生まれます。◆徳育も同じこと。人間らしく生きるための社会の規範・慣行などをしっかり身につけ、そこから自制や自主や社会性が得られるのでしょう。それを欠けば、自分さえよければの風潮が蔓延し、権利ばかりを主張し、家族や他人や次世代への思いやりのない、公徳心に欠ける日本人で溢れかえります(h)。

（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

新しいふれあい社会

認定ＮＰＯ法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局　我孫子市湖北台 6-5-20

平成 30 年 3 月発行（第 48 号）　Tel／Fax　04-7187-5657

点から線、線から面へと波紋は広がり…

榧場　雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

「新しいふれあい社会」が創刊されて 4 年、〈こころの電話相談室〉が開設されて 3 年を経ました。この間、1 度も休むことなく、両々相俟って続けてきたことをうれしく思います。これもひとえに、日頃からの皆さまとのふれあいが励みになったことと、感謝しています。
更に、時を重ねる間に、「新しいふれあい社会」の読者間の連鎖も加わり、深く広いものになって、時間的にも事項的にも、点が線となり、線が面となり、その面も更なる広がりを見せております。

平成 29 年 4 月から「1 年生になったら…」と題し、新 1 年生の喜びと不安を、現在子育て中の母親から寄せられた実体験による感慨を、現在形で記してまいりました。特に私の胸を打ったのは、元中学校教師で、現在は認知症の姑の介護に当たり、高校 2 年と中学 2 年の二人の息子を育てている清水和子さん（仮名）からの感想と励ましと、真摯な要望でした。

清水さんは、在職中に生徒とわが子の高校受験指導に当たり、教師として、母親としての立場の葛藤に苦しんでいた折から、「新しいふれあい社会」（27 年 12 月号）でＮＨＫ短歌投稿歌の
○ 親子から　親と子になる時がきて　との一字のふくらみやまず
を引用して、「親子」をセットで考える関係から、「親」と「子」という関係に変化するときの父親の思いの深さを感じます、との一文に感動し、高校受験に当たって、本人の意思を尊重するように説いてきた体験をつぶさに語り、『老親の介護のために退職できても、子育ては退職できません。ましてや、「親子」から「親」と「子」になる、青年期真っ直中の、二人の子どもの母親として、その思いは強いものがあります。「1 年生になったら…」をもう一歩進めて、青年期の問題について年代を追って教示していただけませんか、市民の一人としての心からのお願いです』、と 1 時間余に及ぶ真摯で謙虚で熱い要望でした。その底に教師魂は失われていないと、感じました。

このように偽りのない個々の相談（点）は、同じような悩みを持つ母親の共感を呼び（線となり）、更に心ある人の問題意識を呼び起こし（面となり）、社会問題と重なって、面が広がってきたと、大きな喜びとしています。

その好事例として、県立高校定時制教諭、黒岩達彦さん（仮名）の独自的実体験を踏まえた上の真摯な要望と相談、更に進んでの問題提起を、本人の言葉のままにご紹介します。

最初に私の「ひきこもりからの再生」とでも名付けたい実体験からお話します。

私は県立高校 2 年の時、推されて学級委員になりました。ところが、受けてから気付いたことにクラスはみんな勝手放題で、注意すると、「いつの間に先生の手先になったのだ！」と揶揄される始末でした。すっかり自信を失い友だちが信用できず、お決まりの不登校から、遂にはひきこもり状態に陥ってしまいました。

心配した両親は、メンタルクリニックへの受診を勧めてくれましたが、「聞く耳持たず」の状態でした。この際も学校からは何の連絡も指導もありませんでした。母親は独りでN心理療法研究所を訪ねて相談しました。N先生は、この期のひきこもりは自分の精神状態の異変を否定しているか、無関心を装っているが、頭の片隅では困ったことだと、思っているはずです。 お母さんが相談に通っていることを正直に伝えて、やんわりと、根気よく、一緒に行ってみないかと勧めてください。いつしか心がほぐれて「僕も行ってみようかな」と言い出すことがあるものです、と言われたそうです。

私はひきこもって1年半、かつてのクラスメートの誰それが、大学に進むとか、就職するなどの噂が耳に入ってくると、尻に火がついたような苛立ちを感じて、まんまとN先生の作戦に乗ってしまい、母と一緒に先生を訪ねました。

そして「私は高2の夏からひきこもって1年半になります。高1を入れると失った時間は3年になります」と訴えました。先生はいとも簡単に「それならその3年を長生きすればいいじゃないか。君は、ひきこもっていた間を、“失った時間”と表現している。その力をもってすれば、十分可能なことだと思うよ」と言いました。

この言葉に発奮し、定時制高校で学び、大学二部に進んで、教師の資格を取りました。そして、自ら希望して定時制高校の教師になりました。定時制は、全日制で学校の環境に馴染めず退学した生徒、非行行為などにより退学を強制された生徒など、多くの問題を抱えた生徒たちの、受け皿になっています。全日制で不登校からひきこもりを体験し、定時制で学び、モラトリアムの恩恵にも与った私にとって、適職に巡りあえた思いがしています。その私にとって、「新しいふれあい社会」（8月号）は、この上ない教科書として、座右の銘とさせて頂きます。

ところで、ごく初歩的で素朴な質問ですが、小中学校の義務教育の間は、ひきこもりについては、いじめ、不登校と並んでというより、その延長線上の問題として、学校としても深刻な問題として、保護者とも話し合い真剣に考えます。ところが、高校生になると、私の場合もそうであったように、学校はほとんど家庭任せ、最終的には退学もやむなしという態度です。それでよいのでしょうか？定時制には、その問題を引きずった生徒もいます。それは、定時制なるが故のことでしょうか？　と大きな問題をつきつけられました。

今さら説明するまでもないことですが、この期は、自己同一性の達成の迷いの時期といわれて、〇〇家の子ども、△△高校の生徒という集団の中で、安心感が与えられ、共通した価値観を持ち、役割を担うことで、人格的な同一性が出来上がっていきます。あるべき自分の姿を、確立していく時期です。ところが、自分の可能性を信じられず、社会（学校社会を含め）を前にして立ち尽くす、いわゆる「同一性拡散」と呼ばれる現象が、「ひきこもり」という形で表現されます。ところが、「高校は義務教育ではない」との理由から、この件については全面的に家庭に委ねてしまっているのではないでしょうか。その是非はさておいて、この時期こそは、家族療法でいう「家族と治す」ときです。ご自分の家族のことを思い起こしてください、とストレートに伝えました。

Ｔさんの話はなおも続きました。

私の担任している生徒にも、引きこもりの経験を持つ生徒が何人かいます。私の過去を知って、「前の学校（全日制）のときは、こんな話は友達にも先生にもできませんでした。兄貴と思って、聞いてください」と言い、「僕は卒業後のことは全く見えません。5 年先の自分の姿が全くイメージできません」と話してくれた生徒がいます。頭を打たれた思いでした。

自分の可能性を信じられずに、社会の前に立ち尽くす。全く私も同じでした。それはまさしく同一性拡散状態ですね、と私の言葉を繰り返し、理解を示してくれましたが、暫らく言いよどみ、それにしても、なぜ兄貴でしょうね。教師は煙たい存在なのでしょうか、と訴えられました。

おっしゃるように、この時期（高校時代）は、自己同一性の達成に迷いがあって、対人関係に距離が取れにくく、離れると寂しいのに、近づくと呑み込まれるような恐怖感を覚えて、孤立することが稀ではありません。自分の中で、身近に親しく憧れにも似た思いで、架空の集団への同一性を確立して、仮の安定を得ようとしています。その対象に、例えば「ひきこもりを考える会」など、想像上の集団、先生と同じ土俵で、共に考える仲間となることで、安心を得ようとしているのではないでしょうか。無名・平等を旨とする自助グループ的発想で考えると、理解できる気がします。「ひきこもりを考える会」のＴ兄貴になってあげてください、と伝えました。

実は、私は兄貴と言う言葉にこだわりがあって、暴力団や非行者のグループなどの悪徳社会的な集団で使っているようなイメージがあり、その集団への参加により、同一性を確立しているような印象がありました。その印象が一度に吹き飛んだ思いです。「ひきこもりを考える会」のＴ兄貴、いいですね。東葛市民後見人の会の相談室もこの会を見守る顧問として、これから後も気軽に相談させてください、と明るい声が返ってきました。

それから 4 カ月を経て、年も替わって 2 月半ばになってのことでした。少々はにかんだ様子で、「ひきこもりを考える会のＴです」と名乗って、電話がありました。
昨年（平成 29 年）3 月、福井県池田町で起きた高校 2 年の男子生徒の自殺事件に関し、人々の印象から薄らいできていますが、その原因が、教師（担任、副担任）による、厳しい叱責、罵倒に耐えかねてのことと明らかにされて、“指導死”などという言葉が、知られるようになりました。
或る調査によれば、指導死は過去 10 年の間に 37 人に及んでいると報道されています。しかし、その報道は、あまりにお粗末で、私の知る限りでは、ＮＨＫと民放一社が、さらりと報じただけで、深刻味のないものでした。マスコミも意図的に、この重大な件を避けているのでしょうか。
「新しいふれあい社会」（11 月号）で、メニンガーは「自殺行為には、①殺したい、②殺されたい、③死にたい、の 3 つの願望が潜んでいる。青年は①が強い。殺したいほどの憎しみを抱く相手は、親や兄弟、教師、友人などで、敵意を表現できず、愛と憎しみの間で揺らぎ、憎むことに罪悪感を覚え、殺したい願望は、殺されたい願望に急転化して、自殺に及んでしまう。そのため、自殺行為には、他者へのアピールがある」と説いています。私は、この個所にアンダーラインを引いてあります。「このペンの力をもって、指導死のことを世に知らしめてください。問題提起してください」、と一気に訴えられました。訴えというより、問題提供であり、意見であり、要望でした。

あまりのショックに、「貴重なご意見ありがとうございました」と答えるのが精一杯でした。
その上で、青年の場合、自殺したい心理状態は一時的です。時がたてば落ち着きます。救いの手が差し伸べられれば、自殺を防ぐことができるのです。魂の叫びを受け止めてくれる相談相手が必要なのです。孤独は、青年を追い込みます。家族や友人関係が保たれていることが大切です。豊かな人間関係こそが、青年の屈折や救いのない状態を緩和します、と率直に伝えました。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日　　毎週木曜日　午前 9 時～午後 9 時

相談担当　　榧場主任相談員　電話番号　04－7100-8369　　個人情報は厳正に取り扱います。

〈編集後記　mission accomplished―無事に任務を完了しました〉

独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業として、4 年間で通算 134 ページに及ぶ「新しいふれあい社会」を通じて、社会や家族が抱える複雑で困難な問題を提起してきました。〈こころの電話相談室〉では、読者（相談者）と筆者（相談員）の間で約 350 件に達する真摯な相談・意見・対話が交わされました。

特に、29 年度は学校におけるいじめ、ひきこもり、自殺、さらに家族危機などの相談や問い合わせが殺到し、8 月号で子供の成長過程における「青年期の体と心の迷い、そして家族」と題した 8 ページの特集号を世に問いました。さらに 12 月号では、「学校はワンダーランド」と題して日本の未来を担う子供たちへの深い愛情と学校・教師への強い信頼と期待を滲ませました。

こうした望外ともいえる反響は当会にとっても驚きと緊張と喜びの連続でした。まるで池に投じた一石が大きな波紋を生み出すように、反響が反響を呼び、点から線、線から面へと広がっていきました。手許には多くの貴重かつ詳細な活動記録が残されました。これらは、まるで天職とでもいうように、淡々と任務をやり遂げた一人のゲートキーパーによる社会への復命書なのです。

そこから私たちは 3 つのことを学びました。

第 1 に、親と子が真摯に向き合うことで、どんな家族の困難や危機でも乗り切れるという強い確信です。健全な家族・家庭の持つ自助解決力を実感することもできました。

第 2 に、学校教育以前に基本的な躾を教える場である家庭教育の重要性です。世に出る前の準備として、子供に対する規範や規律教育の大切さを問題提起するきっかけにもなりました。

第 3 に、「家族が一緒になって危機に対決すべき大切な時期」を逸すると、事態は悪化の一途をたどるばかりです。経緯は長期化して、本人にも、家族にも、ひいては社会的にも、困難な状況をもたらします、という筆者の厳しい警告が心に強く響きました。

当然のことのように、そこから新たな任務が生まれました。

不幸なことに、小中学校時代のいじめや社会人になってからの職場のパワハラが原因で、心の病を抱える精神障害者やひきこもり当事者が数多く存在することも現実です。我孫子市内のひきこもり当事者は少なくとも 500 人以上と推計されますが、これらの社会的弱者に対する相談・支援体制は決して十分とはいえません。このまま放置すれば、いずれは重度の統合失調症、自傷・他害行為に発展し、家庭崩壊などに追い込まれます。そこで、29 年度からこれらの精神障害者やひきこもり当事者、「親亡きあと」の障害者及びその家族の社会的孤立を防止するための支援策として、アウトリーチ事業を試行しています。さらに 30 年度以降は我孫子市公募補助事業として、これらの公的機関では対応しきれない制度の狭間にある生活課題の解決にむけて本格的に取り組む予定です。

最後に、4 年にわたり本誌をご愛読いただきありがとうございました。今後、「新しいふれあい社会」は会員向けの会報として再出発することになります。〈こころの電話相談室〉については引き続きのご利用をお願い申しあげます（h）。

（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）